「TFU 教育フォーラム 2025」

記録集・報告書

2025 年 12 月 6 日（土）

主催：東北福祉大学　教育学部教育学科/大学院教育学研究科

後援：宮城県教育委員会/仙台市教育委員会/河北新報社

目次

概要 1

開会挨拶 2

全体会 5

第 1 分科会(幼保) 9

第 2 分科会(小学) 15

第 3 分科会(中高社会) 19

第 4 分科会(中高英語) 24

第 5 分科会(特別支援) 29

総括 36

学生実行委員名簿 38

TFU 教育フォーラムのあゆみ 40

編集後記 42

TFU 教育フォーラム 2025 概要

１．2025 年度テーマ

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」

２．大会趣旨

本学部では、人格と個性を相互に尊重し合う「共生社会」の実現に寄与する人材の育成を目指し、とくに保育・教育にかかわる専門家の養成を行ってまいりました。皆様方がお暮らしの地域において、卒業生は保育・教育現場で日々精励いたしております。

今年度の「TFU 教育フォーラム 2025」では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」というテーマのもと、それぞれの現場における工夫された実践等について、本学教員養成課程の卒業（修了）生を中心とする発表者より話題を提供していただき、未来を生きる子どもの確かな学びのスタイルを模索していきたいと考えます。

３．ねらい

（１）卒業生を対象に，日頃現場の中で感じている多様な悩みなどについて，本学教員が中心となり解決の方策を共に探ることを目標に，卒業生のリカレントの機会とする。

（２）大学と卒業生及び現職教員との交流を図ることで，現場での課題の解決策を共に見いだす。

（３）在校生が保育・教職への理解を深めることを通して，その資質向上に寄与する。

4．日時・時程

（１）日 時 2025 年 12 月 6 日（土） 11：30 ～ 16：30

（２）時 程

11:30　12:30　13:00　14:30 15:00　16:30

卒 業 生 懇親会	受付	開会行事・全体会 (大教室)	分科会 第１：幼保　第２：小学校 第３：中高（社会）　第４：中高（英語） 第５：特別支援

5．実施方法

対面形式（本学国見キャンパス教室）で実施する。

令和 7 年度　TFU 教育フォーラム　開会挨拶

教育学部長　石原 直

ここに 1 冊の本があります。『「わかる」のしくみ』というタイトルで、本学で教えてくださっていた。西林克彦先生がお書きになった本です。

この本は 1997 年に出版されたものですが、宣伝もしないのに、30 年近く売れ続け、20 万部を超えたそうです。今、予備校の先生が予備校生に盛んに進めているそうです。なぜでしょう。

「わかるのしくみ」「わかったつもり」のことが書かれています。

私たちは何かを解決したと思ったときに、「わかった」と思います。「分かる授業」などと平気で言います。

その途端、学びは止まってしまうと私は考えています。

最近火事が多いですね。香港のマンション火災も悲惨でした。火事で亡くなる方は、やけどが一番多いですが、一酸化炭素中毒で亡くなる方も多いそうです。

似た名前に二酸化炭素があります。人は二酸化炭素では亡くなりません。一と二の違いだけで生死が分かれます。なぜでしょうか。

一酸化炭素は不完全燃焼をして有毒ガスを発生しますが、二酸化炭素は完全燃焼をするので有毒なガスはほとんど発生しないからです。そのため、二酸化炭素や窒素ガスは、冷却したり酸素を遮断したりする効果から、消火剤としても使われます。

ドライアイスは二酸化炭素が固体になったものだと皆さんご存じでしたか。ドライアイスの白い煙は、空気中の水分が瞬時に凍った物です。どんどん知らないことが増えませんか。

西林先生の授業を受けた学生さんは、ほとんどみんな「よく分からない」と言います。私はそれを聞く度に、「それはそうだろう」とほくそ笑みます。私も半分くらいしか理解できません。そのたびに分からないことが増えていきます。

「分かったつもり」になったらそこで思考は停止します。

本当に分かったとしたら、それに関連する「分からない」がどんどん増えていくのです。

今日のフォーラムで、分からないことをたくさん見つけてください。

それが、あなたの新たな学びとなるはずです。

「子どもに関わるみなさんに求めること」

教育学科長 大西 孝志

本日は TFU 教育フォーラム 2025 にお集まりいただきありがとうございます。

私から開会の挨拶として、今年印象に残っている出来事と、子どもに関わるみなさんにお願いしたいことを述べさせていただきたいと思います。(子どもに関わるというのは教育職、保育士に限らず大人すべてを対象としております)

本年 6 月出張の時のことです。大きなスクランブル交差点をわたっていると私の前方を 50 代くらいの男性が歩いていました。突然、その人は白い杖を上げてぐるぐると回し始めました。特別支援教育の授業を受けている人であればどのような状況なのか想像がつくと思います。白状を持っている人が、杖を上げるというのは「困っています。助けてください」というサインです。おそらく、交差点を横断中、方角が分からなくなったのでしょう。数十秒するとそこを車が通行します。従って時間もありません。思い込みでそのまま前に進むと、異なる方向に着いてしまうかもしれません。従って、ヘルプサインを出したのでしょう。

後方を歩いていた私はそれを見て、「これは自分が声をかけて、アテンドしなくてはいけない状況だぞ」と思いました。その男性のすぐ後ろを歩いていた高校生らしき 3 人組は、髪型、服装等の状況からみても「この 3 人では障がいのある人のサポートはできないだろう」と考えたからです。ところが、そこで私にとって予想外のことが起きました。

「おじさん、お困りですか。どちらに行きたいのですか？」

と、3 人組は男性の行くべき方向を確認してその方を歩道まで連れて行ったのです。

この日、私が思ったことは、

「人を見かけで判断するのはいけないことである。」

「この 3 人に関わった親や先生はしっかりと子どもを指導している」

「若い人は共生社会の形成、ダイバーシティということをきちんと身に付けており、これからの日本の未来は意外と・・明るい」ということでした。

さて、みなさんにお願いしたいことです。困っている人を見かけたら自分が前面に出て助けてあげるということはもちろん大事ですが、子どもに関わる人にはさらに大切なことがあると思います。それは、子どもがそのような行動を自然にとることができるように導くと言うことです。指導した子ども 10 人がその行動をとることができれば自分の 10 倍、100 人であれば 100 倍の波及効果をもたらします。

教育や躾には時間と手間がかかりますが、必ず大きな成果が身を結びます。是非、みなさんはこれまでに身に付けてきたこと、自分が教わったことを子どもたちにしっかりと伝えてください。

「協働的な学びとファシリテーターとしての教師の役割」

教育学研究科長 朝倉 充彦

TFU 教育フォーラムに多数の参加者をお迎えし、大変喜ばしく思っています。
この教育フォーラムでは、このあと教育現場で活躍されている現職教員の方々から日々の実践報告がなされることと存じます。在校生の皆さんにとっては、リアルな保育・教育に触れる貴重な機会になるであろうと期待しています。
さて、過日私は小学校と中学校の道徳の授業を見る機会を得ました。その二つの授業とも児童生徒が活発に発言し、授業テーマの核心に子どもたちの思考が迫ってゆく様が実に見事でした。なぜこうした授業が成立したかを考えると、教師の果たしている役割が極めて大きいと感じました。

教師は授業においては、教科の知識・技術を児童生徒に効率的に伝達することが求められます。この時見た二つの授業では、教師が教え伝えるよりも、子どもたちの中にある意見・考えを引き出し、ある子どもの意見がさらにまた別の子どもの意見を導き出すという好循環を発生させていました。教師がファシリテートの役割を担っていたからではないかと私は思います。ファシリテートは辞書で引けば「容易にする、手助けする、促進する」といった意味になっています。教師はティーチャーであるとともに、時にはファシリテーターの役割を果たすことが必要であると感じました。子どもたちが元気に発言し、にぎやかな授業になることが必ずしもいい授業であるとは思いません。他の子どもの意見を聞きながら、沈思黙考する子どもの存在を認めることも大切です。ファシリテーターとしての教師は、沈思黙考する子どもからこぼれる何気ないつぶやきの一言の中にダイヤモンドの原石のような意見を聞き逃さず、そのつぶやきを他の子どもたちが考える材料として提供していました。それによって授業が活性化され、子どもたちの集団思考が展開するという授業になっていました。今回私が見た授業は、子どもが隣の人と協働し、互いに交流しあう授業となっていたように思います。授業は子どもの個別的な学びだけでなく、協働的な学びであることを再認識させるものでした。今回のフォーラムのテーマになっている「協働的な学び」は、教師の働きによって成り立ちますが、特に教師がファシリテーターとしての役割を果たすことがとても大切だと思います。

さて、今回の教育フォーラムのテーマは「個別最適な学びと協働的な学びの一体的実現を目指して」ですが、この後の分科会において、このテーマについての現場の取り組みが報告されることと思います。様々な工夫を凝らした授業報告を非常に楽しみにしています。

最後に、今回の教育フォーラム開催のためにご尽力いただいた先生方や学生の皆さんに感謝申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

令和７年度「TFU 教育フォーラム 2025」全体会パネルディスカッション

テーマ

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して

パネリスト

大友きか子 氏（宮城県教育庁特別支援教育課課長補佐）
佐藤　陽介 氏（仙台市教育局国際教育推進課主任指導主事）
長田　　徹　氏　　（東北福祉大学教育学科教授）

全体概要

実際の学校における授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられる。例えば授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切である。

その際には、児童生徒の資質・能力育成のため、各教科等の特質に応じ、地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら、ICT を活用した新たな教材や学習活動等も積極的に取り入れつつ、それにより実現される新しい学習活動について、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実に効果を上げているか確認しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが期待される。このことを通じて学習指導要領前文に記載されている「一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう」に育成していくことが求められている。

パネリスト発言抜粋（発言のため口語で記録）

佐藤主任指導主事

- ✧ 児童生徒一人一人の成長をいかに信じられるかが大事です。自分もそうしてほしかったように、児童生徒に寄り添う気持ちを忘れない教師になってください。児童生徒には「自分で考え、行動し、人生や社会とつながる学びを積み重ねよう！」と繰り返しお話ししてほしいと思います。
- ✧ 国際探究では、外国人向け防災マップ作成などを想定しています。海外で住み、働くだけでなく、仙台もすでに様々な国にルーツを持つ皆さんが暮らしています。そんな皆さんと協働できる技能と意欲を児童生徒に育みたいのです。そして、成長の早い段階で「国境や文化を越えて学びや自分の力が役立っている」という実感を持ってほしいのです。
- ✧ 国際探究では学びのペース、一人一人の好きや得意を生かした探究内容を個別化します。もちろん、なぜ探究するのか、このなぜ（Ｗｈｙ）も違ってよいのです。探究ではどうしても何をどうするか（How）が気になりますが、大事なことは一人一人が考えるなぜ（Why）なのです。探究のプロセスも児童生徒が生み出すことを期待しています。

大友課長補佐

- ✧ 特別支援教育だからこそ、協働的な学びは必要不可欠と考えます。障害が重度重複する子どもたちも、周囲からの働き掛けによって学びを深めること（これは自分を知ることにつながると考えています）ができます。その働き掛けには、教師の子どもたちに対する見取り（学習評価）と見立て（学習計画）が重要です。
- ✧ 子どもたちは、それぞれ得意な学び方があります。これは、認知面の特性と関係があると思っています。見て覚える子、書きながら覚える子、耳で聞いて覚える子などなど。これは、障害の有無にかかわらずです。
- ✧ 自分の学びやすさ、学びにくさを知り、学び続ける力を付けることが学習の個別化なのです。これは、キャリア教育で言うところの「自己理解」であり、個々の生き方・在り方にもつながるものだと思っています。
- ✧ 他者との違いに苦悩し、孤独や孤立の感覚を常に抱えている子どもがいます。子どもたちのユニークな言動の背景にある、学びにくさや生きにくさを理解し、共感してくれる教師を必要としている子どもどれほど多いことか・・・。　「子ども理解に努めること」「子どもたちにとっての安全感･安心感とはどのようなものか考えること」をみなさんにはがんばってほしいのです。

長田教授

- ✧ 福祉大の学生はめんこいんです。将来への期待や不安に向き合い、葛藤しながらもがんばっています。だから、教師になる皆さんに意識してほしいのは、“勝手に自分の可能性を狭めない”ということです。「あれもやりたい」「これにもなりたい」を昔の人は“二兎を追う者一兎も得ず”と戒めましたが、私は“二兎も三兎も追って全兎得ろ”がこれからの教育だと思います。他者を鏡に、たくさんの登山道を持ち、「好き」を育み、「得意」を伸ばしていくのです。

＜学生感想＞

＊今回の教育フォーラムに参加し、特別支援教育と国際探究科のいずれにおいても、キャリア教育との結び付きが強いことを実感した。特別支援教育では、学びの意味や生かされ方を理解することが、将来の自立につながると感じた。また、国際探究科では、興味・関心を起点とした探究活動を通して、将来の進路や自分の在り方を考える力が育まれると感じた。

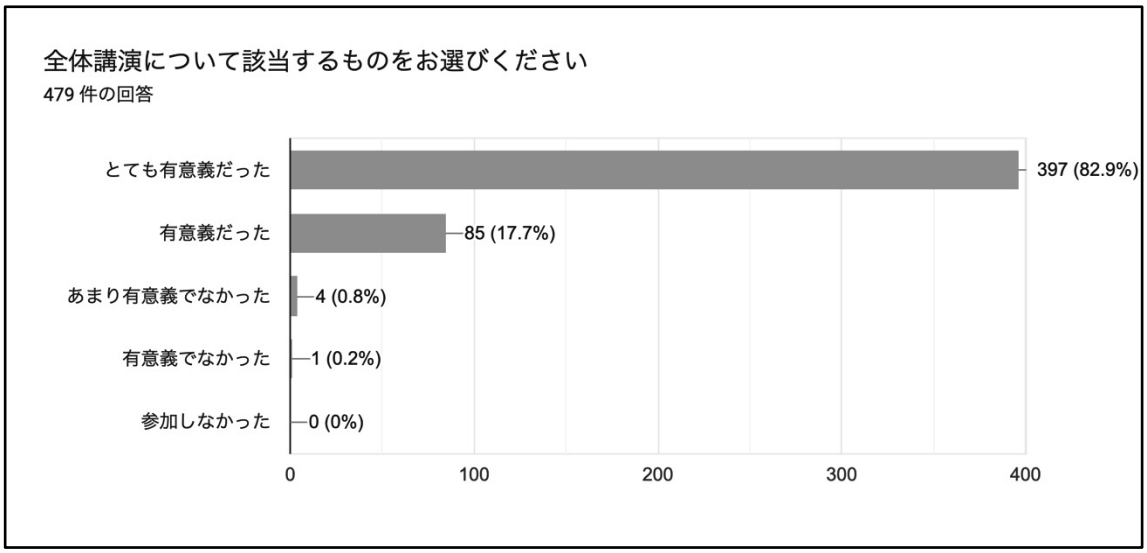
さらに、「協働的な学び」についての理解も深まった。話し合いを行うこと自体が目的ではなく、異なる意見に触れることで自分の考えを見直し、更新していく過程こそが重要であると理解した。この学びを、将来の授業づくりに生かしていきたい。

＊これまで個別最適な学びを教員が一人一人に応じて学び方を工夫することだと捉えていた。しかし、佐藤先生や大友先生の話を通して、特別支援教育や国際的な視点から、個別最適な学びの新たな在り方を学ぶことができた。

特に印象に残ったのは、大友先生が示されたキャリア教育における「意味付け・価値付け・関連付け」という考え方である。この視点は、特別支援教育に限らず、通常学級の授業にも生かすことができると感じた。今回のパネルディスカッションは、今後の学びや実践につながる示唆を与えるものであった。

（藤倉 康誠・松原 健人）

全体会アンケート



＜ご意見＞

- 特別支援と国際探究の視点から、個別最適な学びと協働的な学びについてお話いただき、多くの学びがありました。学習内容が同じでも学び方は児童生徒の得意なことを生かし、共に学んでいくという考え方をこれから大切にしていきたいと思いました。
- 特別支援だから、通常学級だからと区別すべきではないと改めて感じた。個別最適、協働的な学びが必要となる将来、そして今。どのように取り組んでいくのか、何が必要であるのかと学ぶことができました。今後、これらの学びを大切に、学び続けていきたいです。
- 仙台などの教育の最先端に関わるパネリストの話を聞けてとても有意義だった。同じ教育目標だとしても、過程やアプローチの仕方、そこでの生徒教員の役割は違うということを再認識できた。最後の大友先生の話にあった、安心・安全な場所が学校であればいいなと思う。
- 国際探究という科目が発足することを初めて知りました。多様性やグローバル化が重要視されている時代なので、今後どのように社会に馴染んでいくのか楽しみに感じました。
- 障害の有無によらず、子ども一人一人を理解し、その子供にあった教育をしていくべきだと感じました。子どもの好きを育み、得意を伸ばすことの大切さを学びました。
- キャリア教育の重要点について詳しく説明を頂き、細やかで勉強になりました。 今後の教育について深く考えていく一つのきっかけになりました。
- 個別最適な学び、協働的な学びが必要になっていく中で私たちが出来ることが多くあるとともに、常に考えていかなければならないと感じた。みんなで前ならえのままでは個人の才能や自由というのは潰しかねないなと考えつつも、社会へ出る中では必要であることを最低限教えていかなければならないというジレンマが生まれそうだと考える。良いバランスで教育を行えるように、これから残り少ない大学生活で学んでいこうと思いました。とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

- 特別支援と国際探求の観点から個別最適な学びと協働的な学びの一体的について学べた有意義な講義となりました。私は教員になるかまだ定かではありませんが、今回の講義で得た学びは必ず自分の人生に生きると思うので大切にしたいです。
- 教育委員会での事業の話など普段講義では聞かないのでとても面白かったです。全体の講義を聞いて、学校でのグローバル化もだいぶ進んでいるなと感じました。だからこそ、日本人として日本のいい所や自分のアイデンティティを持つこともこれから重要になると思いました。
- 授業でよく聞く「個別最適で、協同的な学び」について、ざっくりとしか考えてこなかったものを、詳しく聞くことができて深く考えるきっかけになりました。今回の内容で協同的な学びがなぜ必要なのかについても考えることができ、実際に現場に出た時もしっかり考えながら行動しようと思いました。
- 多様性を包摂する必要性を実感しました。また、個別最適な学びと、協働的な学びについても理解が深まりました。 今後は、同じ教室で同じ内容を指導しても学び方は人それぞれということにより一層留意して、よりよい教育を考えていきたいとおもいます。「好き」を育み「得意」をどう伸ばすことができるか、悩みがいのある課題です。これからも頑張っていこうと思います。
- 地元である宮城・仙台の今の教育について深く考えることができました。とても有意義な時間をありがとうございました。
- 協働に関するお話で長田先生の「他者は自分を映し出す鏡である」という言葉がとても響いた。この考え方を大切にして生徒たちへの意味のある指導を行っていきたいと感じた。また、多様性が大切にされている現代社会では特別支援教育の視点が重要であるという言葉もあったため、しっかりと特別支援教育についても学びどんな特性を持った生徒に対してもその特性に合わせた指導、寄り添い方ができるようにしたい。
- 特別支援教育と国際教育の二つの視点から、個別最適な学びと協働的な学びの充実について、お二人の話を聞きながら自分の考えを深めることができた。「安心感や安全感がなければ子どもの学びは先出しない」や「教師は教えるよりも学びを支える仕事」など、来春から教師になる自分にとって、これから大切はしたいと思える考え方や言葉に出会うことができた。書き取ったメモを振り返りながら自分の中に落とし込んでいきたい。
- 特支と国際探究の２つの視点から１つの題についてお話いただけたことが良かったです。これから個別最適な学びと協働的な学びを自分に落としこみ、様々な特性をもった子どもたちとより良いものをつくっていけるよう努めたいと思いました。
- 従来の教育の良さと新しい教育の良さ、どちらも理解した上で、子どもの視点に立って関わっていくことが重要だと思いました。貴重なお話を聞くことができ、勉強になりました。ありがとうございました。
- とてもためになるお話ばかりでした。形を変えていっている教育の世界で、教師もどのように順応していく必要があるのかを深く考えさせられました。

第 1 分科会（初等教育：幼保）

＜第 1 分科会（幼保）報告＞　　司会：3 年　佐々木美颯・鈴木莉央

参加者　卒業生：1 名，一般：3 名，在学生 234 名，本学教員 6 名，計 244 名

テーマ：『幼児教育における個別最適な学びと協働的な学び』

講　師；　岩手県立大学社会福祉学部　准教授
井上　孝之（いのうえ　たかゆき）先生

＜講師紹介＞

幼稚園教諭として宮城教育大学附属幼稚園や特別支援学校で長年勤務した「現場のスペシャリスト」としての経歴を持つ。その豊富な実務経験を基盤に、現在は岩手県立大学社会福祉学部にて、理論と実践を融合させた保育・教育研究を展開している。特に、現場の保育者が抱える課題に寄り添う姿勢が高く評価されており、群馬大学の音山若穂教授や東北福祉大学の上村裕樹准教授らと共に、保育の質向上や安全管理、ICT 活用に関する共同研究を精力的に推進している。これら学術的なエビデンスに基づいた知見は、日本保育学会や日本保育保健学会（日本保育保健協議会 業務執行理事）での活動を通じ、広く社会へ還元されている。

また、一方的な指導にとどまらず、参加者の気づきを引き出す「ファシリテーション」の手法を用いた研修指導にも定評がある。現場のリアリティを熟知した視点からの助言と、対話を重視したワークショップは、多くの保育者から「明日の保育に活きる」と厚い信頼を得ている。

本フォーラムの第一分科会では、「幼児教育における個別最適な学びと協働的学び」を主題に、学年を越えた学生同士の交流と、園外保育の指導計画作成を中心とした実践的なワークが行われた。終日を通して、講師の岩手県立大学准教授　井上孝之先生による丁寧なファシリテーションのもと、学生の主体性を引き出し、相互理解を深めるための多様な工夫が取り入れられていた。

１．オープニングとアイスブレイク

分科会冒頭では本学准教授の青木一則先生より講師紹介が行われ、その後、井上先生によるオープニングとアイスブレイクが進められた。井上先生は、本学の先生方とのエピソードについて雑談を交えてお話しされ、学生が緊張せずに活動へ参加できる雰囲気づくりに配慮されていた。また、活動の中で「終了の合図」を共有し、声を張らずに注意を集める工夫として、合図を見た人から順に真似をしていくという方法を取り入れていた。これは、視線の集め方を体験的に学べる実践的な仕掛けとなっていた。

続いてグループごとに自己紹介が行われ、名前・学年・好きな食べ物・好きな家電などの話題を通して、和やかな雰囲気のなか交流が始まった。「せっかく仙台に来たのだから〇〇を食べるべき！」というテーマでは、仙台のご当地グルメを挙げながら意見を交わし、地域理解と親睦を深める時間となった。

２．指導計画作成に向けた説明と導入的な学び

園外保育の指導計画作成に向け、様式や前提条件、行き先などに関する説明が行われた。集中して話を聞くことができるように、時折、井上先生が全体に体を伸ばすよう促すなど、環境づくりに配慮されていた。また、「右から」という指示に対し、言葉通り右へ傾く学生と、先生の動きを真似て反応する学生に分かれた場面では、井上先生がその違いを取り上げ、「言葉の受け取り方の違い」を示しながら、異なる意見や解釈を受け止める姿勢の重要性について伝えていた。さらに、Google や AI の活用については「内容に沿っていれば利用してよい」と明確に示し、情報活用スキルの育成を見据えた指導が行われていた。

３．前半のグループワーク：指導計画案の立案

3 年生を中心に、ねらい・内容・行先・活動時間配分などの基本事項について、グループで話し合いが行われた。この段階では大まかな構成を固めることが目的とされ、個別的な配慮や細部の検討（バス乗車順、車椅子の利用など）については後半に扱うよう示された。

グループワークでは学生同士の意見交換が活発に行われ、計画の骨組みを共有し合う姿が見られた。また、話し合いを継続したいグループには休憩中の活動も認められ、主体的に学びを深められるよう配慮がなされていた。

４．多学年交流を意識したワークの再始動

後半では、1・4 年生が新たに加わるため、井上先生より冒頭に「全員が参加しやすい雰囲気づくり」の重要性について説明があった。あわせて、学年ごとの参加目標が提示され、話を聞く際には頷くなどの「参加している姿勢」を意識するよう促された。多学年が混在する活動で生じやすい“参加のしにくさ”を軽減するため、丁寧な声掛けが行われていた点が特徴的である。

その後、改めて簡単な自己紹介を行い、3 年生の代表が前半に決定した活動内容や行先について共有した。これにより、全員が共通理解をもった上で後半の作業に進めるよう配慮がなされていた。

５．後半のグループワーク：指導案の完成と個別的配慮の検討

後半の作業では、グループ名の決定、模造紙への記入、役割分担（園長、副園長、主幹保育士、担任、加配 2 名）の設定などが行われた。指導案の流れや時間配分を整えた上で、個別的配慮については付箋を用いて整理し、模造紙の周囲に貼り付ける方法が採られた。この方法により計画の全体像を視覚的に把握しやすく、協働的な検討を促す工夫となっていた。

また、井上先生からは、模造紙の使い方（縦向き・片面使用）や座席配置などについて適宜補足説明があり、1･4 年生だけが偏って集まらないよう席替えを促すなど、全員が等しく議論に参加できる環境づくりが随所に見られた。さらに、先生方は各グループを巡回し、学生からの質問に丁寧に対応していた。

6．講評

活動の締めくくりとして、実行委員からのまとめの言葉が述べられ、その後、群馬大学・音山若穂先生より講評が行われた。音山先生は、学生が楽しそうに活動に取り組む姿を高く評価し、「保育や子どもが好きな人は、保育を語ること自体を楽しむことができる」と述べた。また、今回のねらいは、あえて“中途半端なところまで進めること”にあり、「もう少しがんばれば完成しそう」という段階で終えることで、次の学びや活動への意欲につながるとの助言があった。子どもとの活動を考える過程そのものを楽しむことの大切さが伝えられた講評であった。最後に本学准教授の上村裕樹先生より、分科会全体の振り返りと、対話型でのグループワークの役割と学年を越えた学習の意義についてお話がなされた。1－4年生、それぞれの学年の学習経験が互いの学びを刺激し合う働きとなり、個の学びが結びついて共有されていく知識（共有知）を、講師の井上先生が学生全体のグループワークを通して労いの創発してくださったことに対して、感謝と労いの言葉が述べられた。

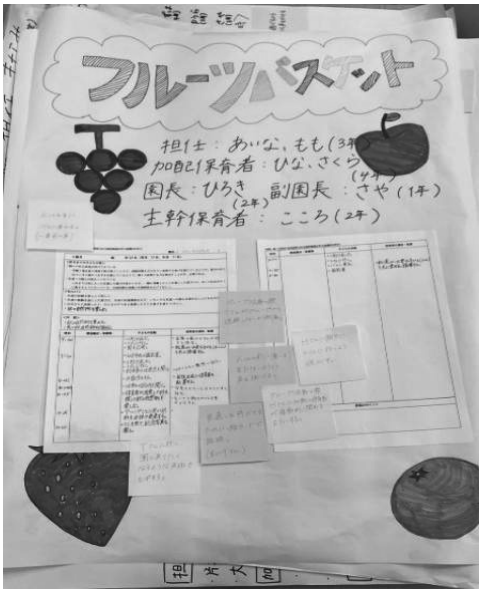
7．まとめ

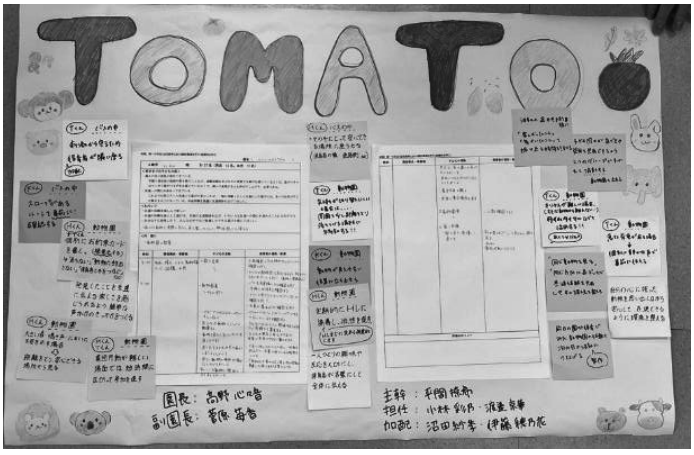
本分科会を通して、学生は多学年で協働しながら園外保育の指導計画を立案する経験を積むことができた。講師陣は、活動への参加を促す丁寧な声掛けや、場の雰囲気づくり、情報を活用した具体的な指導を行い、学生の主体性、協働性を引き出していた。学年を越えた意見交換を通して、学生一人ひとりが互いの考えを尊重しながら計画を形づくっていく過程は、将来保育者として求められるコミュニケーション力やチームワークを育む有意義な学びとなった。

8．感想

教育フォーラムを通して、井上先生が学生の様子をよく見ながら、声掛けや活動の進め方を柔軟に変えていた点が特に印象的だった。全体への働きかけや、多学年が混在する場面での丁寧な説明によって、学生が安心して参加できる雰囲気が作られていた。こうした関わりは、保育現場における子どもへの配慮とも重なる部分が多いと感じた。また、学生同士が学年を越えて意見を交わしながら協働する姿を見て、計画を立てる過程そのものが学びにつながっていることを実感した。今回の経験を通して得た視点を、今後の実習や学内での活動で生かし、常に周囲の様子に目を向けながら行動していきたい。

（3年　行場深優・髙山美優）





＜第1分科会　ワークショップ＞

幼児教育における個別最適な学びと協働的な学び
－ 異学年で知識と経験を持ち寄る園外保育デザインワークショップ －

井上 孝之（岩手県立大学社会福祉学部　准教授）

1. 幼児教育における個別最適な学びと協働的な学びの特徴

幼児教育における「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、幼児期特有の発達のあり方や生活の営みに根ざしており、小学校以上の教科学習を基盤とした学びとは本質的に異なる特徴をもっています。幼児期の学びは、幼児の生活そのものが学びの場であり、主体的な遊びや人との関わりを通して、興味・関心、情緒、社会性、基礎的な思考力など、多面的な力が相互に育まれる点に大きな違いがあります。

2. 幼児教育における「個別最適な学び」

「個別最適な学び」は幼児一人一人がもつ発達の連続性・生活リズム・興味や意欲の向きに応じて、遊びや活動の環境を柔軟に構成することに重点が置かれます。幼児は自己の興味から探索行動を広げるため、保育者は「環境を通して行う教育」の視点から、空間・素材・人の配置を調整し、幼児が自らのペースで試行錯誤し、気づきを深めていく過程を保障します。つまり、幼児教育における個別最適化とは、子ども自身による選択とじっくり関わる時間を可能にする**“環境の最適化”**が中核となります。

3. 幼児教育における「協働的な学び」

「協働的な学び」は日常の遊びの中で自然に生まれる相互作用を基盤としています。幼児は友だちとの関わりのなかで、役割交代、ルールづくり、共同での試行錯誤などを経験し、その過程で社会性・思いやり・調整力が育まれます。協働的な学びは、遊びの展開や子ども同士の関係性の深まりに応じて生成的に立ち上がるものであり、保育者はその芽生えを丁寧に受け止めながら、必要に応じて言葉を添えたり、遊びの環境をさらに調えたりして促進していきます。

4. 個別最適な学びと協働的な学びの位置づけ

個別最適な学びと協働的な学びの位置づけこのように、幼児教育における個別最適な学びと協働的な学びは、子どもの主体性と生活の連続性を尊重し、遊びを中心とした総合的な育ちのプロセスとして位置づけられる点に特徴があります。幼児の「やってみたい」「もっと知りたい」という内的動機づけを大切にしながら、個々のペースを保障しつつ、他者との関係の中で豊かな学びのあり方を支えることが、幼児教育の大きな特徴です。

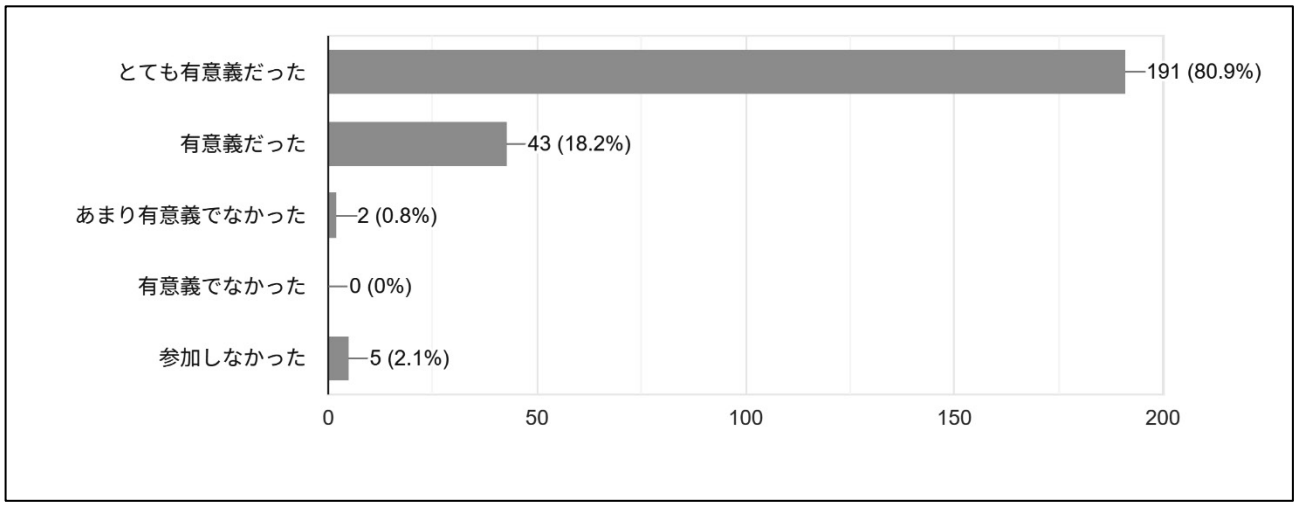
5. 異学年で取り組む園外保育デザイン演習

1年生から4年生までの学生が学年を越えて協働し、5歳児の園外保育を企画するワークショップを実施します。本ワークショップでは、幼児期の学びへの理解を深めるとともに、保育者に求められる観察力・構想力・コミュニケーション力を実践的に育てることを目的としています。

本日は、異学年の縦割りグループに分かれ、それぞれの学びや経験を持ち寄りながら、5歳児の育ちに応じた園外保育のねらい・内容・活動の流れ、保育者の具体的な援助や必要な環境構成などを検討します。幼児の主体的な遊びの広がりや保育者の役割を意識しつつ、グループで一つの企画を形にしていくプロセスを体験してください。保育の実践場面を想定したワーク形式の取り組みですので、積極的な参加を期待しています。みなさんの知識と実践で得た経験を持ち寄り、創造的なアイデアと協働による学びを楽しみにしています。

第１分科会　アンケート結果

1　分科会でのワークショップの内容について該当するものをお選びください（236 件の回答）



・実習では遊びの指導計画を立てる機会がありましたが、園外保育の活動計画を立てることは初めてだったため、難しさとともに新たな気づきを得ることができました。異学年との交流により、自分自身では出てこなかった考えや関わりなどがあり、とても勉強になりました。

・園外保育の指導計画や配慮を考えてみて、個別的な配慮を考えるときに、特性によりどんなことに難しさを感じるのかや、どのような配慮をすると難しさを軽減できるのかを考えることができて勉強になりました。

・初めての幼保コースの先輩方と交流する機会でとても参考になることが多々ありました。支援が必要な園児への対応を考えた際に、自分では考えつかなかった支援の仕方や声掛けなどを考えていて、今後の参考になりました。初対面で緊張しましたが先輩方が優しく声をかけてくれたり、自分の案を参考にしていいよと見せてくれたりしてくださったおかげで楽しく活動することが出来ました。

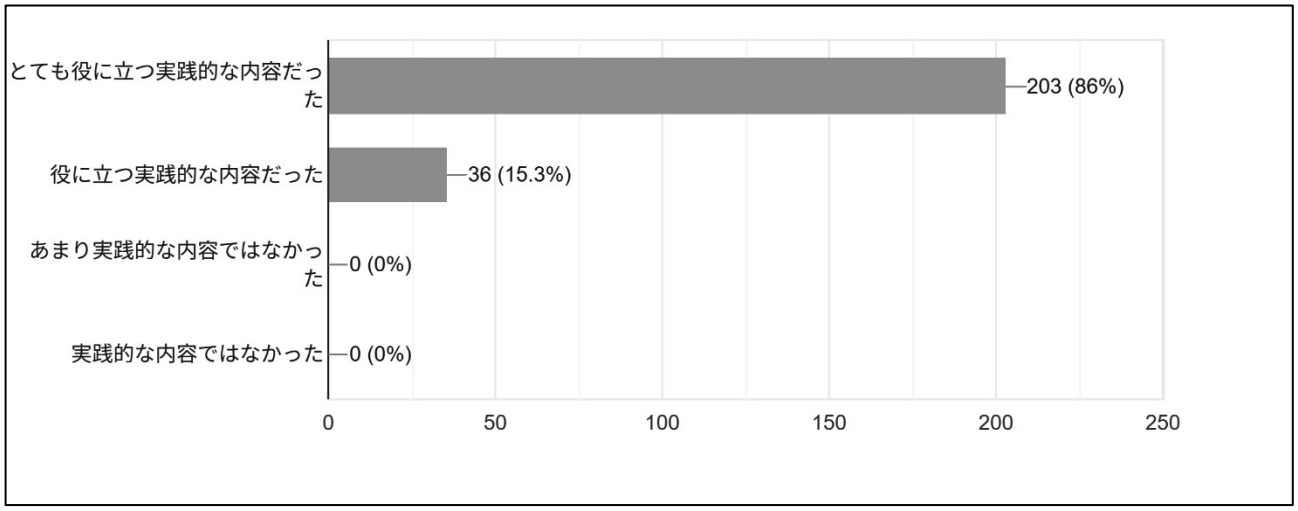
・3 年生、4 年生の先輩方の実習を実際に終えた人が気づく内容がよりリアリティがあっておもしろかった。また、2 年生が言った内容に対する指摘が的確で自分たちが想像しきれていない部分や、考えきれていない範囲に気付かされてとても勉強になったし、すごい…ばっかり言っていた。

・1～3 年生の意見を聞くことで、自分にはない考え方を知ることができ、とても有意義な時間にすることができました。1 人で計画を立てるよりも何人かで計画を立てることで、子どもたちにとってより良い保育や必要な援助を考えることができると感じた。

・実際に子どもたちと行う活動を他学年の学生と考えることで学びが深まりました。子どもが楽しめる活動を協働して考えることができて良かったです。

・先輩の発言を聞いて、言葉の表現や様々な視点から物事を見ることができたと思いとても有意義な時間であったと思う。

2　今回のフォーラムは現場で役に立つ実践的な内容となっていましたか（236 件の回答）



・実践的な内容となっていて、現場に出た時自分ならどうするだろうと考え、とても葛藤しました。より良い子どもとの関わりを常に考えて行きたいと思います。
・今年は参加型だったためより深く学ぶことができたと思います。自分で実際に考えて参加することで、受け身ではなく主体的に学ぶことに繋がると思いました。
・まだ 1 年生なので実習とかなかったりして実際の保育の現場がわからなかったのですが、先輩たちと一緒にこうやってグループ活動することができて、どういった配慮が必要なのか、どのような保育者の援助が大切なのかが知れてすごく良かったです。
・他学年との交流や将来への繋がりについて、改めて考えることができよかった。子どもと関わるうえで、話を通して学び続けることが大切だと感じました。
・最初の講義を通してワークショップを行い、個別にどう対応するかを踏まえて考えることができた。インプットとアウトプットを通してさらに学びの定着ができたと感じた。
・今年度の教育フォーラムのテーマでもある「協働的」な学びを体験することができました。全体会で知識を深め、分科会でのワークで実際に協働するということを実践できました。
・支援学級のキャリア教育について印象に残りました。これからの教育者に必要なことは決まったことを教えるだけではなく、子どもが主体的に学ぼうとしたことを支えることであると感じた。
・他学年の学生と一つの作業をして、特に 4 年生はこれまでの実習など沢山の経験をしてきて、自分には思いつかないような意見がどんどん出てきて、実践的な活動の大切さを改めて感じました。
・他学年と話をすることで新鮮な空気感で、ひとつのものを成し遂げることが出来てよかったと感じた。これはどうかなあれはどうかなとお互いに意見を出し合うことで、これからの幼稚園実習などでも活用できるような有意義な時間になったと感じた。
・時間が足りないむず痒さがあり、もう少し突き詰めていきたいと感じた。
・知らないことがたくさんありました。でも一年生で参加していない保育の友達もいるので、その子達よりも一つでも知識が増えたのかなと思うと、ゼミで声をかけていただき参加することができてよかったです

＜第２分科会（小学校）　報告＞

司会：菅野　碧唯，橋本　拓磨

参加者　卒業生：2 名　在校生：157 名　本学教員：7 名　その他：9 名　　計 175 名

1　髙橋　俊介 先生（2022 年度卒）

教員になってから 4 年目の先生で「心の揺さぶりのある道徳の授業づくり」というテーマでお話していただいた。道徳の授業では、価値観の揺れや多様な意見に触れることで道徳的な心を育む場であると強調している。授業では反対の意見を認めず思考が深まらなかったことから、丁寧に問い返し、なぜその行動がよいのかを議論させる重要性を学んだ。板書、授業展開の工夫により、価値観の揺さぶりを意図的に生み出した。多様な意見に触れることで、トラブルの多い児童も集団の輪に入れるようになった。様々な児童の意見を聞き、何が大切かを考えることが道徳科の核心である。

質疑の様子

「学校生活の中で道徳の価値観を養うのは道徳の時間以外でもできるのでしょうか」という質問に対して、髙橋先生は、休み時間の後の授業に遅れてきたときや、学校のルールを守らなかったときに自分に誠実なのかと問いかけさせるなど、道徳で学んだことを日常生活で声掛けを行っていた。

2　木村　健人 先生（2021 年度卒）

教員になってから 4 年目の先生で「いま望まれる授業づくり―高学年における個別最適な学びの実践を通して―」というテーマでお話していただいた。木村先生は授業内で自由進度や協働的な学びを取り入れている。社会科では、児童が自ら調べ、まとめ、振り返ることで意欲が向上し、単元テストの平均点も上がった。一方で、個々の進度差が課題となり、学級経営・風土づくりの重要性が示された。また算数科では、教科書に加えてプリントや個別声掛けを行い、認め励ます関わりで学習意欲を高めた。教師主導から児童主体への転換が成果を生んでいる。

質疑の様子

「歴史の授業で興味・関心を引き出すために例えばどんな声掛けがありますか。」という質問があった。木村先生は「自分ごとに当てはめて、例えば、踏み絵だったら自分の写真を印刷してそれを踏めるか、児童の好きなアーティストの写真を踏めるかなどで考えさせる授業を行った」と話していた。

ディスカッション

「これからの時代を生きる子供たちのために、今、望まれる授業とは」について、髙橋先生、木村先生、そして本学の三浦和美教授に、パネリストとしてご意見をいただいた。児童の学習意欲を向上させるには、一人一人の考え・意見を認め励ますことが大切であると実感した。

〈感想〉教師が一方的に進めていくような授業ではなく、児童が主体となるような授業や、児童の心を揺さぶる発問を考え、構造していくことが大切だと学んだ。　（3 年　富樫　心春、安達　莉子）

＜第２分科会　発表№ 1＞

心のゆさぶりのある道徳の授業づくり

髙橋　俊介（天童市立成生小学校・2022年度卒）

1. 実践の背景

特別の教科　道徳の目標にある「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」を行うためには、「児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。」と私は捉えている。また、児童が普段の授業でより深い学びを得るためには、自分の考えとは異なる考えにも触れることが大切であり、それにより、考えの幅が広がり、より広い視野で物事を考えることができると考えている。

現在担任している学級（５年生）は、「正しいとされていることを、きちんと行うことが大切である。」という傾向が強く、間違った言動をしている人が許せずに、注意をしてトラブルになったり、自分と違う考えを受け入れることができず、頑なに自分の考えを押し通したりすることがある。そこで、下記に示す４つの手立てを道徳の授業において用い、児童が様々な考えに触れることを通して、相手の立場で解釈することができるようにしたい。そのことにより、「自分が信じていたことが正しいかどうか」が分からなくなり、自分の考えを変えるきっかけになると考える。このような授業づくりを通して、自分とは異なる価値観を認め、日常生活にも生かすことができる授業づくりをしたいと考えた。

2.実践の方法・内容

1　児童相互が情報を共有しやすいように、ICT を活用する。
2　最初の自分の考えを明確にし、他者の考えに触れて、考えがどのように変わったのかなどを振り返りに蓄積することで、自己の変容や目指す姿が分かるようにする。
3　児童同士での意見交換や、児童のつぶやきから授業を創る工夫をする。児童のつぶやきを拾うときは、少数派の意見や、正しいことと反対の考えなどを拾い、児童が自分の考えをより深掘りすることができるようにする。
4　様々な考えに触れ、受け入れることで新たな価値観に出会うことができるようにする。そのために、他者と議論したり考えを擦り合わせたりする授業を構想し、心のゆさぶりを生み出していく。

3. 考察　〇学研　みんなの道徳５年「うばわれた自由」（A-1　善悪の判断、自律、自由と責任）の授業実践を通して

・タブレット上で自分の考えを書くことで、自分で考えをまとめることはできたが、共有場面で考えの変容や気付きなどが表出しなかったため、あまり深まらなかった。学習カードを活用したときに、友達の考えを聞いたことで、自分の最初の考えを書き直している児童もいた。このことから、学習カードは心の変容を知るのに有効な手段であり、他の意見に触れたいときには学習カードを写真で撮って共有するなどの ICT 活用をしていくとより効果的だと感じた。また、学習カードに書く際は、自分の考えの変容を明らかにするために、記入したら消さないようにするなどの工夫をしていきたい。
・「本当の自由」とは何かを考えさせたが、多くの児童が「ルールや約束の中での自由」と答えていた。この日の授業は「正論＝正しい」という価値観で進んだが、児童にとって当たり前のことを考えるだけで、新しい考えを求めたり、「え？」と立ち止まったりすることがなかった。そのため、「『ルールを守った上での自由』と『ルールなしでの自由』ではどちらが本当の自由なのか」を問うことで、一度立ち止まって考えることができたのではないかと感じた。今後の授業づくりにおいても児童が立ち止まって考えることができるような、心をゆさぶる発問や問いかけを吟味していきたい。
・授業実践を通して、４つの手立てだけでは、相手の考えに触れることはできるが、互いに価値観を認めていくことにはあまりつながらなかった。そのため、他の考えに対して、自分がどう思っているのかを積極的に聞き出していくことが必要だと感じた。また、ただ語らせるだけではなく、「なぜいい考えなのか」や「なぜ違っているのか」など、相手の考えを評価していくことを通して、自分の考えを変容させることにつなげていきたい。

＜第２分科会　発表№２　＞

いま望まれる授業づくり～高学年における個別最適な学びの実践を通して～

木村　健人（大崎市立古川第五小学校・2021 年度卒）

1. 実践の背景

昨今の学校現場では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められている。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実により、児童が主体的に学習に取り組むことができるとされている。今年度、６学年を担任していて、児童の学習意欲の差が課題であると感じた。児童の学習意欲に差が出やすい、社会科と算数科において、個別最適かつ協働的な学びを実践し、取り組むこととした。

2. 実践の方法・内容

【社会科における実践】

自由進度学習を取り入れ、問題解決型の学習を実施した。以下に授業の流れを述べる。

（導入１０分）

・本時の課題の把握、動機付け

・資料の確認

（課題例）「豊臣秀吉は、天下統一を進めるためにどのようなことを行ったのか。」

（展開３０分）

・本時の課題について動画教材（NHK for School「歴史にドキリ」）から分かったことをまとめる。

・本時の課題について教科書、資料集から分かったことをまとめる。

（調べ学習例）「①豊臣秀吉はどのように勢力を伸ばしたのか。②豊臣秀吉が行った取組はどのようなものか」

（終末５分）

・本時の課題について、学習の「まとめ」を記入する。

（まとめ例）「豊臣秀吉は、信長の跡を継いで、天下統一を成し遂げた。天下統一を進めるために、検地や刀狩を行った。」

【算数科における実践】

適用問題に取り組む時間を長く設定し、児童が多くの問題を解くことで、学習内容の習熟や達成感の醸成を図った。以下に授業の流れを述べる。

（導入５分）

・問題の把握

・学習課題の設定

（展開①１０分）

・解き方の練り合い（個人→グループ）

（展開②２５分）

・適用問題（プリント、タブレット学習）（誰かと取り組んでも良い）

（終末５分）

・本時の振り返りの記入

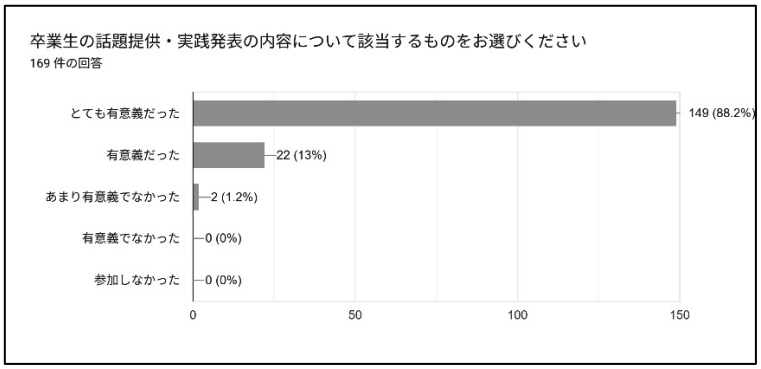
・まとめ問題（簡単なもの、全員正解を目標）への取組

3. 考察

社会科における実践では、多くの児童が意欲的に学習に取り組むことができた。児童が、互いに資料から見つけた事柄を共有し合い、学習課題の解決に向けて取り組む姿が見られた。また、単元テストの点数も向上した。

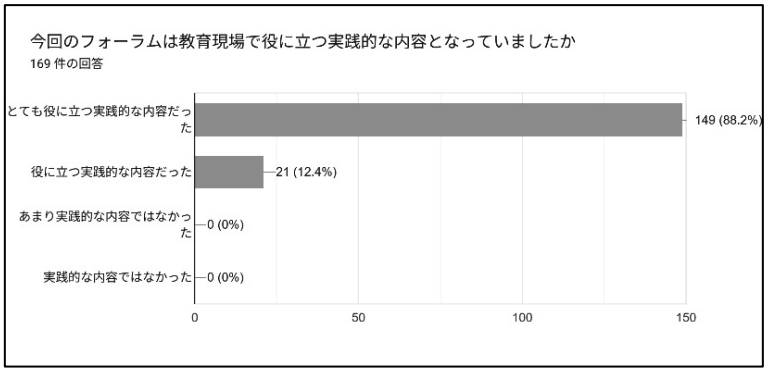
算数科における実践からは、児童に達成感を味わわせることができた。児童一人一人が、自分の習熟度に合わせた適用問題に取り組み、担任が採点することで、達成感や成就感を一人一人が感じることができた様子が見られた。また、「算数が楽しみ」という児童が増えた。

第２分科会（小学校）アンケート結果



・自由進度学習や問題解決型学習といった教育実習では経験のない授業の実践発表を聞くことができ、大変勉強になりました。現場に出た際に私も個別最適な学習、協働的な学習の実現に向けどんな授業を展開すれば子どもたちに力がつくのかを吟味していけるように、今のうちからできることをしっかり勉強していきたいと思いました。

・授業前に子どもがどう考え、なんと答えるのか予測していくことの大切さを学んだ。授業前に準備していることで、生徒の学びや一人ひとりに合わせた学び方を子どもに提供できると思った。子どもに問いかけをすることで、考える力を育成することができる、また話し合い活動を取り入れることによって他の友達がどう考えているのか、また自分の意見を深め考え直すことにもつながると思った。



・来年からの教員生活に役立つ話が沢山ありました。いきなり個別最適な授業展開を作ることは難しいですが、子供たちにとって、学びとはなんなのか、分かるとはなんなのか、考えながら少しずつ出来るようにして行きたいと思いました。分かったこともありながら、疑問点も多く出てくる有意義なものになりました。

・個別最適で協働的な学びの重要性を感じました。授業の最初の５分だけでも、自由進度学習を取り入れ、少しずつ子どもたちに主体的に学ぶことができる機会を増やしていきたいと感じました。そして、何事も自分ごととして捉えさせ、自分で考え自分で問題を解決していく力を身につけさせられるように、教員は多様な考えをもち、多様な視点から物事を考え、学び続ける必要があると感じました。

＜第３分科会（中等社会）　報告＞

司会：大友 陽叶，佐藤 百花

参加者　一般 10 名，在校生 58 名，本学教員 4 名，計 72 名

１．南川 凛佳先生（2023 年度卒、宮城県角田高等学校勤務）は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指した日本史探究の授業実践について報告された。支援と実践の両面を意識した結果、他者から学ぼうとする姿勢や主体性の向上が見られた一方で、個別学習と一斉講義のバランス、評価方法の検討といった課題も明らかになったと述べられた。

質疑の様子

授業づくりの苦労に関する質問に対しては、多人数を対象とした授業であっても取り残される生徒が出ないよう、どこに照準を当てて指導するかが難しいと述べられた。また、学力差のある学習者同士の交流においては、机間巡視を行い、学習の達成が半数以上に達した段階で「ロイロノート」を用いて意見を共有させることで、それぞれの生徒が他者の考えからヒントを得たり、思考を深めたりできるよう工夫していると具体例が示された。まとめとして、個別の学びと協働の学びは相互に補完し合う関係にあることが強調された。

２．徳江大輔先生（2021 年度卒、仙台市立第二中学校勤務）からは、欧米の近代化が日本に与えた影響について仮説を立てさせ、「Society5.0」の資料を使って政治・経済などの視点から問いを構造化し、生徒が歴史を概念として捉えることを企図した探求授業の実践が報告された。発問によって概念化を支援することや、仮説の根拠を歴史的視点に基づき説明させる指導の重要性が示された。

質疑の様子

話し合いによる時間不足については、中心となる発問に重点を置き内容を絞ることで必要時間を確保しているという。記録確認の効率化には、単元と毎時の問いを結び付けた「問いの構造化」が有効とされた。さらに、生徒が要点をまとめる訓練を行い、毎時の細かな評価ではなく、単元全体を通して大きく評価する工夫をしていると回答された。

感想

「個別最適な学び」と「協働的な学び」は対立せず、お互いを豊かにするものであるということや、大観して物事を捉えることが苦手な生徒に対しては問いを焦点化して提示することで、授業内容への理解がより深まっていくということを学んだ。

（３年　前島 桃花・松原 健人）

＜第３分科会　発表要旨　№1＞

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指した授業実践
～一人で学び、仲間と深める歴史的思考～

南川 凜佳（宮城県角田高等学校・2023 年度卒）

1. 実践の背景

近年の教育改革では、「令和の日本型学校教育」が提唱され、Society 5.0 時代に求められる資質・能力を育成するために、生徒の進度や関心に応じた「個別最適な学び」と、多様な他者との対話を通じた「協働的な学び」の一体的な充実が文部科学省の狙いとして強く求められている。従来の一斉授業では、生徒の理解度や関心にばらつきがあり、学習への受動的な姿勢が目立っていた。

そこで本実践は、日本史探究の授業としての深い学びや主体的な問いを立てる力の育成を出発点とした。具体的には GIGA スクール構想による ICT 端末の普及という環境変化を踏まえ、ICT を活用して自己調整的に学ぶ個別最適な学びと、他者と協働して思考を深める協働的な学びを融合させた。これにより、自分のペースで探究する自由と、他者と考えを深め合う場の両立を図り、主体的・対話的で深い学びを実現する授業設計に取り組んだ。

2. 実践の方法・内容

本実践では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に機能させるため、支援と実践の２つの側面から授業を設計した。

（１）支援：個別最適な学びを支える仕組み

自己調整を促す「個別最適な学び」の支援として、ロイロノートを用いた確認テストで学習前段階の理解度を可視化し、生徒自身が何を学ぶべきかを自覚できるようにした。また、自身の関心や習熟度に応じて問いを設定する課題を取り入れ、多様な考えを引き出す活動を促した。毎時の終わりには振り返りシートの記入を徹底し、自己調整力の育成と思考の整理を支援した。

（２）実践：協働的な学びを深める仕掛け

対話を通じて思考を深める「協働的な学び」の実践として、授業内容が分断されないよう、前時の学びを活用しないと解決につながらない連続性のある学習課題を設定した。これにより「大政奉還の解釈」など、歴史的な論点をめぐる深いディスカッションが自然に生まれた。

活動においては、一人では難しい課題でも友人と協力して解決に向かい、思考の幅を広げられるようにした。ロイロノートで意見を共有し、ピアコメントを通じて多様な解釈に触れる機会を設けた。これら個別と協働の活動を循環させることで、生徒の学びの質的深化を図った。

3. 考察

主体性や協働的な思考の促進に効果が見られたが、継続的な深化に向けた課題が残る。主な課題として、ICT 活用や自己管理における生徒間のリテラシーの差への対応、個別学習と一斉講義の比重の工夫、基礎知識の不足による問い立て段階での挫折へのアプローチ強化、そして自己調整や協働といった学びのプロセスそのものを従来の評価基準にどのように反映させるかという方法論の確立が挙げられる。

今後は、これらの課題を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のさらなる深化を図る。具体的には、自己評価と振り返りの活用を強化し、生徒自身が学びの質を意識できる自立的な探究者の育成を目指すとともに、学びのプロセスを多角的に捉える評価方法を確立する。また、ICT を活用し、生徒の学習履歴や振り返り記述を分析することで、教師が個々の課題をリアルタイムで把握し、知識定着の支援や問いの立て方に関する具体的な個別フィードバックを強化していきたい。

＜第３分科会　発表要旨　№2＞

歴史的見方・考え方を用いた探究学習の実践報告

徳江 大輔（仙台市立第二中学校・2021 年度卒）

1. 実践の背景

本実践は今年度（令和７年度）第２学年の歴史的分野で行ったものであり，仙台市中学校社会科研究会の提案授業の実践例である。本研究会の研究主題は「自ら課題を見付け，追究し続ける社会科学習」である。この視点を用いて，探究学習を実践した。本校の生徒は，学習意欲も学力も高い傾向にある。また，「Society5.0」の資料を用いて，産業の変化による社会の影響を学習させた。産業の基盤が変わると（Society が進化すると）社会に大きな影響をもたらすといった視点で学習していくことで，歴史を大観して捉えることができるようになるのではないかと思い実践した背景である。今回の研究授業では，「欧米の近代化を受けて，日本の社会にどのような変革が起こるのか仮説を立てよう。」といった内容を実践した。その際に，産業革命による社会の変化（Society2.0 から 3.0）に着目させた。欧米諸国の近代化による影響が日本にどのような変革をもたらすか仮説を立てさせることで，歴史的事象を追究し続けることができるのではないかと考えた。また，「Society5.0」という身近な社会の事象を取り扱うことで，歴史的事象に興味・関心を促すことができ，今後も予測困難と言われる現代社会に課題意識を持ち，課題解決のために追究し続ける態度を育成していけるのではないかと考えた。

2. 実践の内容

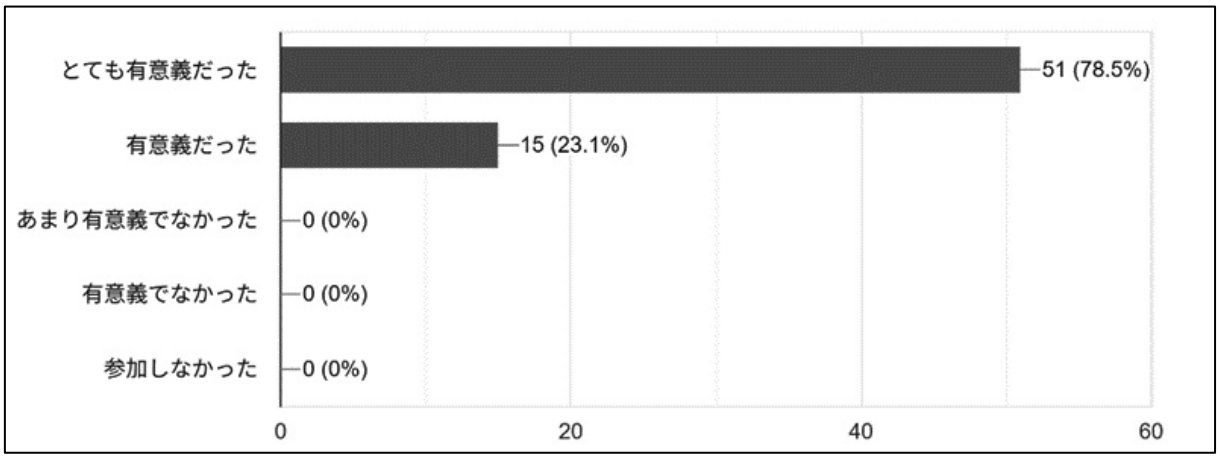
○仮説を立てる際の根拠を明確にする
　⇒問いの構造化を工夫し，個別の知識から概念として歴史を大観させた。
○個別最適な学びの実現
　⇒個人探究・ペア学習・ギャラリーウォーク（ロイロノートの共有を含む）
　　教師との対話等といった，様々な学習形態を用いて，個人の考えを深める学習の実現
○歴史学習の視点の設定
　⇒江戸時代と欧米諸国の近代化の実情を比較できるように，視点を設定した。
　　①政治　②経済　③外交の視点に絞り，その全てに思想が絡んでくるという視点で学習を深めた。

3. 考察・課題

○生徒たちは歴史を個別の知識として捉えてはいるが，概念として理解をしていない。
　⇒歴史を大観して，まとめるためには視点を与えて，粘り強く指導する必要がある。
○視点を与えたり，問いを構造化したりすることで，生徒たちは概念を獲得していく。
　⇒いきなり抽象的な説明はできないが，構造化していくことで，少しずつ歴史を大観できるようになっていく。「つまり，どういうこと？」という発問を投げかけることで，更に理解が深まっていった。
○仮説を立てる授業の評価仕方には工夫が必要である。
⇒授業検討会でも大きな話題になった。仮説を立てるための根拠をしっかり述べられているのか。その根拠が歴史的な見方・考え方を用いたものなのか。仮説の検証時に，事実と異なるものであったとしても，考え方や概念が適切なものであったのかを分析していくことで，主体的で深い学びの実現につながるのではないかと考える。
○歴史的事象を仮説的に取り扱う必要があるのか。
⇒仮説を立てることが目的ではなく，仮説を立てる際の根拠を作ることに歴史的な見方・考え方が使われると考えている。そのため，仮説を立てることは先を見通すことにつながると考える。

＜第 3 分科会　アンケート＞

1. 卒業生の話題提供・実践発表の内容について



〈ご意見〉

・どちらの先生の話も生徒の反応や他の先生の考えなどを踏まえており、とても参考になるものだった。自分の生徒時代にロイロノートを使用していたため、教師の立場に立った際のロイロノートの使い方を深く知ることが出来てよかった。

・仮説を立てる授業が、歴史の見方・考え方に重要な歴史的背景や、概念の生徒理解に繋がると感じた。

・ピアコメントにより意見を交換する授業や仮説を立てる授業から、意見を言葉にして伝え合うことが大切だということがわかりました。これからの授業形態では、意見の交換や学んだことをまとめさせることが必要だと思いました。

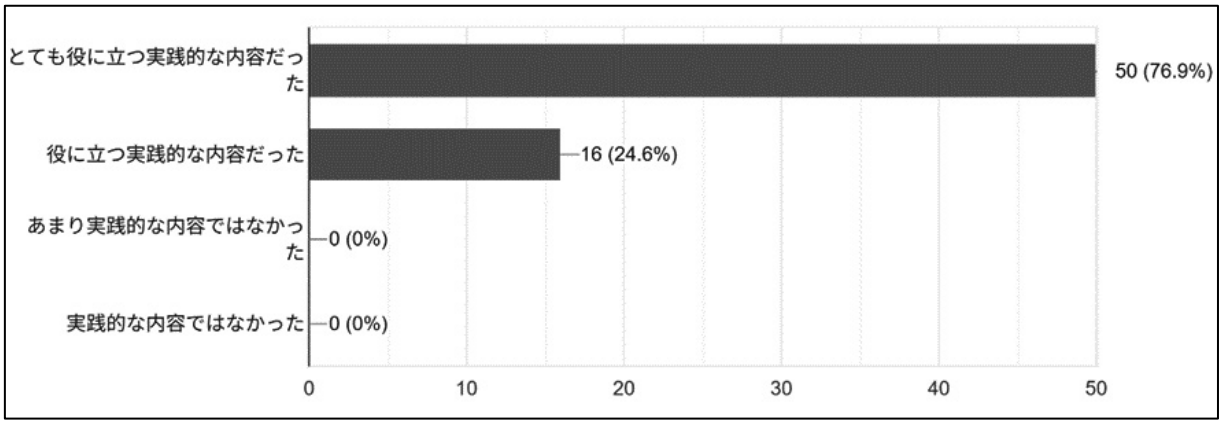
・歴史の授業に仮説を立てるという考え方が面白いと感じた。既に答えが出ていることに対してあえて自ら仮説を立て、根拠を用いて考えることで、暗記学習ではなく、歴史的事象に関する理解がより深まると感じた。

・6 年目でこのレベルにいるのがすごい。とても大きな刺激だった。僕もまず教員になることは絶対達成することだが、そこから高みを目指して絶対にいい先生になります！

・個別と一斉は真逆のものだと思っていたが、どちらも取り入れることで、探求的な授業になるのだとわかった。生徒に対しての概念的な仮説を、外交や政治・経済に分割、焦点化して、生徒が主体的に理解できるような工夫は、とても参考になり、いつか自分もそのような授業ができるようにしたい。

・非常に考え抜かれ、丁寧に設計された授業の実践報告で、とても勉強になりました。先生方の熱意と技術の成せる仕事だと思います。ただ教え込むのではなく、生徒の多面的な資質の成長を促す細かな仕組み作りに感心しました。共有いただきありがとうございます。

2．今回の教育フォーラムは教育現場で役立つ実践的な内容だったか



〈ご意見〉

・はじめての参加だったがどの時間も 1 年生の私でも参考になり、勉強になることばかりだった。全体会での特別支援教育の視点や、教育委員会の取り組みに加え、分科会で高校や中学の教師の実践からの意見を聞くことができ、これまでにない経験をした。たくさんの知識、考えを得ることが出来たと考える。

・長田徹先生がまるでいつもの講義を行うようにディスカッションを進めてくれたため、程よくリラックスしてフォーラムに参加できた。 今回のフォーラムで、他の人の意見を聞き、自分の意見や考え方を再構築することができた。来年も参加したくなった。

・個別最適な学びと協働的な学びは、2 つが互いに支えあって共存するものだと理解しました。生徒の教育体制がもっと拡充して、それらを自分が指導するとなった時、今回の学びが活かされると思いました。

・同じく現場で働く立場として、とても刺激を受けました。さらに自分の授業をブラッシュアップしていきたいと思います。

・授業の仕方や歴史に対してどういう角度で授業を作っていけばいいかを聞けてよかった。

・将来の教員に求められることを予測するのが難しいと思った。常に最新の情報をつかみ、子供たちがどのような学びをしていて、今後はどのように変化するかを、考えられるようなるべきと感じた。

・次期学習指導要領を見据えた話題、実践事例で大変興味深く拝聴しました。ありがとうございました。

＜第４分科会（中等英語）記録＞

司会者:出生圭亮・横川京

参加者　卒業生２名、一般１名、在学生 28 名、本学教員　５名、計 37 名

1. 松本芽生先生(令和６年度卒)は現在、宮城県仙台市の五橋中学校に勤務しておられる。外国語教育における個別最適な学びを大切にしながら、活動を通じて多くの人と関わり、力を伸ばしていく協働的な学びの実践について報告された。さらに、生徒の自主性を引き出すための学習方法、教育現場の様子など数多くの話題提供をしてくださった。

質疑の様子

学校外でも学べる現在、学校に通う利点は何かという質問に対し、実際に友達の意見を聞いて自分の意見を話し、人と直接関わることが協働的な学びにつながるため、人間性の成長に必要なものが身につく利点があると返答された。さらに、部活動で協調性を育てつつも学びの場を提供する方法、生徒から教員として認められるために心がけている点などの質問も出され、活発な議論が行われた。

2. 本学英語科コースの４年生である鎌本圭史郎氏は、2024 年８月から 2025 年５月までの 10 か月の間、姉妹校であるフィンランドのラウレア応用科学大学に留学された。長期留学を通じてフィンランドでの経験や文化の違い、留学を終えて得た学びについて報告された。

質疑の様子

フィンランドを留学先に選んだ理由を問われた際、大学からの手厚いサポートがあり英語を使って生活ができることと回答された。また、福祉大国とされる現地への感想を問う質問に対して、福祉の面では生活支援をはじめ、国からのサポートが手厚いと感じたと返答された。留学を控えている学生に推奨する勉強内容を問う質問には、発音学習、英文の構造の演習、会話の中でよく使う文を事前に学んでおくことなど、実体験をもとにした現場で役立つ内容が伝えられた。

感想

松本先生の報告では、生徒一人ひとりの特性を尊重しながら協働的な学びを大切にする姿勢が強く伝わった。特に、生徒同士の関わりを通じて人間として必要な力を育むという考え方に深く共感した。鎌本氏の報告からは、長期間の留学生活では文化の違いに留まらず、国内では経験することのできない一生の学びを得ることができるのだと感じた。　　(2 年　秋田夢空・福島奈々美)

＜第４分科会　発表要旨　№１＞

外国語教育における個別最適な学びと協働的な学びの実践を考える

松本　芽生（仙台市立五橋中学校・2024 年度卒）

1. 実践の背景

現在、仙台市内の中学校に勤務しているが、外国語の授業が好き・得意であるという生徒と苦手・得意ではない生徒にはっきりと分かれていると感じる。日々の学校生活の中では、様々な生徒が１つの空間で学習を行っている。そのため、授業の中に ICT 機器を取り入れることで個別最適な学びと協働的な学びの両方を実現させることができると考え、ICT 機器を使用した授業の実践を行った。

2. 実践の方法・内容

①英語であいさつをする

授業の開始時には、必ず英語であいさつを行う。そうすることで、徐々に英語に慣れさせ、頭を英語モードに切り替えさせる。（例）Good morning, everyone! How are you? What day is it today?　How is the weather today？

②デジタル教科書を用いる

教員用のクロームブックを教室にあるテレビに繋ぎ、授業の目標を提示したり新出単語を確認したりしながら、音読練習や内容の確認などに使用する。

例：ＰＣ(ピクチャーカード)を用いて音声だけを聴かせ、音に慣れさせる。その後、全体で内容を確認する。また、範読をデジタル教科書で行うことも可能である。

③ロイロノートを使用する

ロイロノートを使用することで、自分でペースを決めて学習することができる。また、1 枚のカードにたくさんの文章を打つことができるため、一人ひとりのレベルに合った学習を行うことができる。「回収箱」という機能を使うことで、生徒へフィードバックをすることができ、クラスの中で各生徒が作成した課題を提示して共有することも容易になる。

④英語の翻訳を使う

英語の翻訳を使わせることも多々ある。全て翻訳に頼るのではなく、必要な部分のみを効果的に検索するという適切な使い方を指導し、実際に使わせることで、生徒の学習の有益な手助けになることもある。

⑤画像を検索する

自分の好きなものを紹介する活動や出された課題に画像を使用したいとき、生徒は自分自身のクロームブックを用いて調べることができる。

3. 考察

ＩＣＴ機器の使用について「個別最適な学びと協働的な学び」という側面から考えると、メリットがたくさんある一方でデメリットもあると感じる。様々な学習にスムーズに取り組むことができるが、生徒が実際に自らの手で文章を書く機会は減少している。また、適切にＩＣＴ機器を使用できる生徒も多いが、全てを翻訳に頼ってしまったり、うまくＩＣＴ機器を扱えなかったりする生徒も少なくない。ＩＣＴの時代だと言われている今だからこそ、教師は生徒が自分のペースで取り組みやすい環境を整えつつも、実際に紙に書く課題や、クラスメイトと話し合う機会を増やして、協働的な学びとのバランスをとっていく必要がある。また、現在、全生徒にクロームブックが配られており、その中にデジタル教科書が入っているが、普段の授業では生徒自身にこのデジタル教科書を使用させることは稀である。その理由として、①約 30 名に一斉にクロームブックを使用させる際、全員の学習状況を把握するのが難しい、②音読練習に使用する際、周りを気にして効果的な学習成果が得られない可能性があることが挙げられる。しかし、一人一台端末が進んでいるからこそ、生徒が学びやすい環境を整え、「個別最適な学びと協働的な学び」両方の学びを大切にしていく必要がある。

＜第４分科会　発表要旨　№2＞

フィンランド留学　～北欧文化と魅力～

鎌本　圭史郎（東北福祉大学教育学部４年）

1. 留学の目的

私は2024年8月から2025年5月までの約10ヶ月間、フィンランドのラウレア応用科学大学に交換留学生として留学した。英語教員になる前に、長期の海外生活をしたいという強い思いがあり、この留学を決意した。この留学の目的の一つは、英語力の向上である。長期の海外生活を通して、日常会話を中心とした英語力を向上させたいという思いがあった。また、英語で会話したり、授業を受けたりなど、実践的に英語を学ぶと同時に、文法や発音などの英語の勉強をすることにより、より深く英語を学び、英語と向き合う時間を増やしたいと思っていた。もう一つの目的は、様々な面で「体験する」ということである。異国の学生とのルームシェア、異文化体験、空手道など、多くのことを体験することができる機会であった。これらを通して、自分の価値観や視野などに良い影響を与えたかった。

2. 留学での体験と学び

交換留学のため、現地の通常の大学に通い、英語で開講されている授業を受けた。特に印象的だった授業の特徴は二つある。一つ目は、プレゼンテーションやディスカッション、ワークショップ等、生徒同士で協力し合う授業スタイルが多かったことである。テストの点数で評価することは少なく、プロセスをより重視しているように感じた。二つ目は、実践的で日常に結び付けた学習が多かったことである。授業にゲストを招いて話し合ったり、授業の内容を自分自身と結び付けた課題が出されたりした。授業の内容を日常と結び付ける大切さ、日常から学べることがたくさんあることに気づいた。

私は空手道部に所属しているため、フィンランドでも道場の練習と大会に参加した。大学以外の場でのコミュニティができ、とても良い体験となった。また、同じ流派でも、日本の空手と考え方や練習方法が違う部分が多くあり、とても勉強になった。

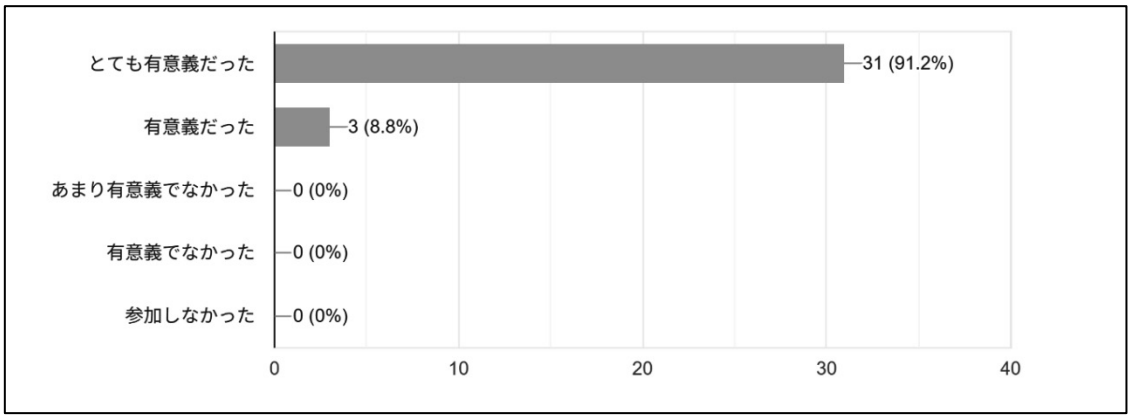
私のフィンランドでの生活は約10ヶ月間だったが、長期の海外生活だからこそ気づけることがたくさんあることが分かった。国の特徴や国民性、その国ならではのカルチャーショックの乗り越え方など、短期の滞在では気づけないことである。また、これらの気づいたことを基に、その理由や背景を考えたり調べたりすることもとても興味深いものである。例えば、フィンランドは北欧雑貨が有名であるが、その理由の一つは、長く厳しい冬を乗り越えるためなのではないかと気づいた。フィンランドの冬は、家での時間が増え、鬱症状になりやすいため、家での時間を少しでも幸せなものにするために、素敵なデザインの北欧雑貨が発展したのではないかと感じた。

3. 留学を終えて

10ヶ月の長期留学を終え、この留学の目的はほとんど達成することができたと思う。留学当初の英会話では、話せないことが多く、話せてもゆっくり文を構築して話していたが、留学の後半になると、話せることが増え、反射的に返答したりすることができるようになった。会話の内容によっては話せなかったり、ゆっくりになってしまったりすることもあるが、英会話時のストレスが減り、会話を少しずつ楽しめるようになったため、英語力の向上を確実に感じている。また、「２．留学での体験と学び」で述べているように、様々な体験をすることができた。留学前に考えていたことの他にも、予想以外のことにも気づいたり、体験したりすることができた。この留学での経験は、自分の将来に役立つものであると確信している。

＜第４分科会　アンケート＞

1. 第4分科会で行った話題提供について



＜ご意見＞

・個別最適な学びについて、実際の教育現場の状況を踏まえつつ具体的な提案がなされていて興味深かった。参加者からの関心も高く、質疑応答の内容も勉強になった。また、長期の海外研修の体験談も多くの資料と共に紹介してもらえたおかげで、短期留学とはまた違う魅力と意義が感じられた。

・大変貴重で有意義な時間でした。松本さんのお話では、教育の現状やそれに必要な工夫を知ることが出来ると共に、改めて来春に控えている教育実習への意識が深まりました。鎌本さんのお話では、同じく来春に控えている留学への心構えや英語学習の大切さを再認しました。

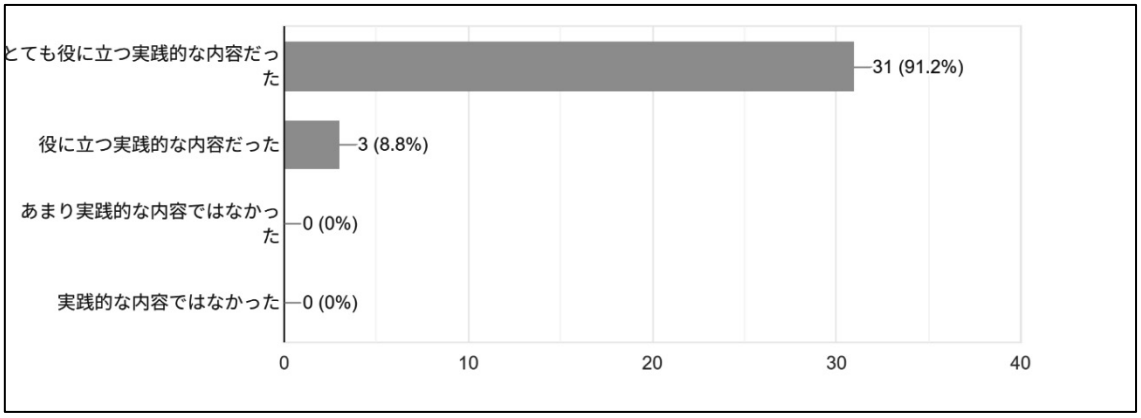
・フィンランドの大学の授業が日本に比べてより実践的で経験しながら学びを深めていくのが興味深かったです。留学時の英語の具体的な勉強法も参考になります。辛い冬を耐え忍ぶ中からサウナ、可愛い雑貨やマリメッコのような気分を明るくしてくれるデザイン、ムーミンなどが生まれたかもしれないということに納得しました。Sisu の中にフィンランドらしさが出ていると思いました。

・実際に現場で働いている方々の意見が聞けたのがとても勉強になりました。教育現場の実態や、教育実習にも活用できるような行動面のお話が大変ありがたいと思いました。留学のお話では、これから留学を控えているので文化的な面で学ぶものがとても多かったです。異文化の中で暮らしていくという事が大変貴重な経験になるという事が深く理解できました。

・実際の教育現場での個別最適な学びや協働的な学びの指導を聞くことが出来てとても有意義な学びになりました。そして、これから教員になる上で必要な能力はとても大切なことだと感じた。留学の経験談を聞いて、日本でも出来る英語の勉強法があるのをたくさん知ることが出来た。

・有意義な時間をありがとうございました。特に松本さんのお話を聞いて、自分も教員になった際に使いたいと思うものが多くありとてもためになりました。

２．今回のフォーラムの教育現場での有用性について



＜ご意見＞

・最初の大西先生の体験談がとても心に残っていて、自分が困っている人を助けるだけでなく、困っている人を助ける子どもを育てることができる教員にならなくてはいけないと思いました。

・特別支援において、環境を整え、包摂性を高めること、協働的学びを実践することは、特別支援の子どもたちだけではなく、一人一人の子どもや先生も含めた大人の成長につながっていくということが分かったような気がします。フォーラムはとてもよく運営されていたと思います。

・今後の日本の教育、国際教育のビジョンを見据え、私たちがどのように学習をしていく必要があるのかを意識させられる良いものでした。

・様々な視点からテーマに沿った意見を聞くことができ、非常に有意義だった。進行も滞りなく、スムーズな運営であった。

・全体で学ぶところから、選択の学びの場までスムーズに会場移動もできてとてもよかったです！

・とても有意義な時間でした。実際に働いている方々からのお話というものがいかに貴重かを痛感した日でした。

・教育現場の課題を明確にして自分の人生頑張りたい

・進行がとてもスムーズかつ、教育において必要とされていること、大変さなどを知ることができました。

・今後の自分のビジョンにも関わるお話をたくさん聞けてよかったです。こういった機会大切にしていきたいと思います。

・テーマに沿ってたくさんのお話を聞くことが出来てとても良かった。これからの人生で常に考えていくことが大切だと改めて感じた。本当にありがとうございました。

＜第５分科会（特別支援）　記録＞

講話　　Ｄ&Ｉの推進による共生社会の実現を目指して
～特別支援教育の視点から～

金　彦志（東北福祉大学教育学部　教授）

第５分科会では、金彦志先生の講演を聞く機会を得た。最初に、私たち自身が多様性を考えるためのアイスブレイク、次いで、Diversity と inclusive の定義と教育や教員にとっての意義、最後にポストイットを活用した「アクションプランの作成」といった流れだった。

アイスブレイクでは、３～４人のグループを作り、メンバーの共通点と違いを見つけるもので、Diversity（多様性）という言葉を深く考える機会となった。辞書的意味だけではなく、メンバー間で違いに気づき、具体的意味をもつことを改めて確認した。

「児童生徒の多様性を理解する」では、教員として向き合う児童生徒の多様性を考える機会となった。金先生のスライドに示された４人の子どもたちは、性格、学習スタイル、家庭環境など多様な背景をもつことが、文部科学省資料含めて示された。「児童生徒の多様性」は障害の有無に限定されず、配慮や支援を必要とする状況であることを学んだ。

Diversity と inclusive については、定義と重要性が述べられた。Diversity を理解し、私たちがそれを受け止め実現するためには、inclusive が必要だ。互いを認め合い、尊重し支え合うことで、誰もが参加可能な社会に向かう。Diversity と inclusive を教育の中で実践するとは、多様な学び方を認め合うことであり、自分に合った学びの選択が可能となる。つまりインクルーシブ教育は、障害の有無にかかわらず「共に学び合う場」の設定と、一緒に学び合うことができる教育課程や指導方法が求められる。

「Ｄ＆Ｉ時代の教員」は、インクルーシブな学級経営が前提で、「個別最適な学びの提供」「指導方法の柔軟性」「協働を促す力」「特別支援教育に関する知識・技能」が求められる。従来までの「同じ方法で、同じように」という指導から、個々の児童生徒の学習スタイルや特性に対応できる柔軟な指導への転換は非常に重要だ。

最後に、「自分ができるＤ＆Ｉ行動」を１つポストイットに書きだした。Ｄ＆Ｉのアクションとそのプランは、誰かが提示するものではなく、私たちが日常生活の中で自ら学び、考え、実現するものだ。ポストイットに書くことで、自らできるアクションを考える貴重な活動となった。

金先生は韓国から日本の大学院に留学し、特別支援教育を学び、今年度本学に着任された。金先生ご自身が、まさに Diversity と inclusive を具現化している御一人であると思う。

【感想】

現在の教室には必ず多様性における配慮が必要な子がいるため、まずは教員が受け入れて教育に生かす大切さを学んだ。一緒にいるだけでなく、個々が持つものを生かす環境や指導ができるよう Ｄ&Ｉ時代の教員としてできることを考えていきたい。（３年大沼悠衣）

＜第 5 分科会　講話要旨＞

D&I の推進による共生社会の実現を目指して
～特別支援教育の視点から～

金　彦志（東北福祉大学教育学部　教授）

現代社会は、年齢、性別、国籍、障害有無、文化的背景など多様な人々で構成されている。その一人ひとりの違いを尊重し、誰もが安心して自分らしく生きられる社会をつくることが「共生社会」の目指す姿である。多様な背景や価値観を持つ人々が共に生きるためには、ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）の推進が重要な課題となる。Diversity（多様性）は人々の違いを認めること、Inclusion（包括）はすべての個性が受け入れられ存分に生かされている状態を意味している。多様な人材が互いに支え合い、力を発揮できる環境を整えることは、組織や地域の活力にもつながる。

一方、多様な子どもが共に学び合う学校づくりが求められる中、教育現場でも D&I の理念が注目されている。文部科学省は、教育現場における D&I の推進を積極的に進めており、特に、障害の有無や性別、価値観などの違いを尊重し、すべての子どもが共に学び合う「インクルーシブ教育システム」の構築に力を入れている。

D&I の推進を目指すうえでは、障害の有無にかかわらず、子ども一人ひとりが異なる価値観や学び方、感じ方をもち、得意なことや苦手なこと、さらには家庭環境も多様であることを踏まえ、それぞれのニーズに応じた支援や学びの機会を保障していくことが求められる。そして何よりも重要なのは、子どもたちが「自分も受け入れられている、自分もここにいていい」と実感できる環境を整えることである。その実感が、互いの違いを尊重し合う心を育み、真の意味でのインクルーシブな学びへとつながっていく。

そのためには、教師が子どもたち一人ひとりを違いのある存在として受け止め、まず理解しようとする姿勢が大切である。成果のみに注目するのではなく、その背景にある思いや理由に目を向けることで、安心感が得られ、その結果学びへの意欲や他者への思いやりにもつながると考えられる。また、学級全体で互いの個性を理解し合う活動を通じて、違いを認め合う文化を育てていくことも重要である。

また、D&I の推進により教職員同士の関わりも広がる。授業での工夫や支援のアイデアを共有することで、個々の教師が気づかなかった視点を得ることができる。教員同士が連携し、それぞれの専門性や経験を生かし合うこと、また互いの実践から学び合う文化を育てることが、学校全体のインクルーシブ化を支える力になる。チームとして子どもを支えることが、D&I の実現に向けた第一歩かもしれない。

D&I は特別な取り組みではなく、日々の教育実践の中に活かせる考え方である。子どもたちの違いを豊かさとして捉え、ともに生きともに学ぶ姿勢を大切にすることが求められている。

＜第 5 分科会（特別支援）　報告＞

司会：髙久和花，孫田結菜

参加者　計 81 名　（本学学生:73,他大学学生:1,本学卒業生:2,本学教員:4,その他:1）

1．河田　利早子先生（2021 年度卒）

河田利早子先生は、教職 5 年目で大学時代から聴覚障害や言語を専門に学び現在、山形県立山形聾学校でご活躍されている。大学在学中の学びや教職 1 年目に在籍していた筑波大学聴覚特別支援学校での学びを基にした実践の話題提供であった。

聴覚障害児における D&I は、ダイバーシティの視点「言葉を表現できる」「言葉を正しく書ける」ことの上にインクルージョンの視点「自己の障がい理解」「他者理解」「自己開示」があることで実現できるとしており、子どもの気持ちに寄り添い、言語力を育てる支援実践を紹介した。また、社会に出た時の行動や「健聴者の常識」について伝えることも含め、子ども達が社会に出る将来を見据えた指導実践であった。

【質疑の様子】

「学生時代のサークルで学んだ手話以外で、子ども達と会話する中でさらに手話を学ぶことはあるのか」という質問に、最近は「たし算」という手話を学んだと例を出し、学習で使う単語などは子どもと一緒に勉強しながら使っていくと述べた。

また、「実践にあった『嬉しい』『楽しい』という同じ手話の指導のように『大変』＝『しんどい』『辛い』というような意味が同じ場合はどのように指導しているのか」という質問に、子どもが言いたいことを考え、他の言い方も手話で置き換えて覚えてもらうようにしていると述べた。

【感想】

話題提供では、聴覚障害児教育において子ども同士が互いを認め合いながら過ごせる D&I の実現のために、基礎である「ことばを育てる」大切さを学んだ。子ども達の気持ちに寄り添った言葉に置き換えるなどの指導を通じ、子ども達は言葉の使い方や日本語のおもしろさを理解し、それが周囲との活発なコミュニケーションの活性化につながる。このことは様々な人と関わった際に自分らしく過ごすことに生かされることを示している。自己の障がい理解や他者理解、自己開示を通した交流及び共同学習の実践においては、お互いが理解を深めながら共に学び合う協働的な学びの大切さが理解できた。報告の中の交流学習での子ども達の様子が印象的で、教員が支援し、交流する子ども同士にとって過ごしやすい環境を整えることが、安心して学ぶことにつながることが分かった。

授業実践の報告から、子ども達が将来社会に出て楽しく生活できることは、小学部の学習の延長線上にあり、その点を意識した指導の大切さを学ぶことができた。今回の学びを糧にその子らしさを生かしていけるような教員を目指していきたい。　（3 年　大沼悠衣）

＜第５分科会　発表＞

聴覚特別支援学校での実践と学び

河田　利早子（山形県立山形聾学校・2021 年度卒）

1. 実践の背景

山形県の特別支援学校教諭として採用され、山形聾学校に赴任して４年が経過しようとしている。本校は聴覚に障がいのある幼児児童生徒が通う学校であり、幼稚部から専攻科まで、２５名の子どもたちが在籍している。今回は、大学在学中の経験や、教職１年目でお世話になった筑波大学聴覚特別支援学校での学びを元に、本校で実践してきたことについて紹介する。

2. 実践の方法・内容

＜聴覚支援学校での実践内容について＞

（１） ダイバーシティの視点　～児童が自ら考え、自己理解を深めるための取り組み～

① 誰もが見て分かる、自ら活動できる工夫（全学部）

日課表、避難誘導、やることボード

② 児童の気持ちに寄り添い、言葉で表現するための工夫（小学部低学年）

気持ちカード

③ 言語力を育てる工夫 （小１）

毎日の振り返りシート、学習プリント

（２）インクルージョンの視点　～D&I の推進による共生社会実現に向けた取り組み～

・交流及び共同学習に向けて（小４・自立活動）

○事前学習

・自身の聞こえについての学習

自分の聴力がどのくらいで、どんな音が聞こえにくいのか、どんな音だとうるさく感じるのか、オージオグラムを見てやりとりした。聞こえの表と結果の見比べを行ったことで、生活の中で聞こえていない音が実は多くあるということへの気づきがあった。

・補聴器機についての学習

前回の交流学習を振り返り、補聴器機を通常校で装用する場合の懸念点について考え、対処法を話し合った。例えば、昼休みの体育館では補聴器が音を全部拾ってしまい、耳が痛かった。そのため、補聴器のボリュームは下げ、休み時間にはロジャー（補聴援助システム）の接続を切っておく、等である。更に、聞こえにくい場面の説明や、どのように対応してほしいかなど、自分の聞こ

えについて友達に知ってもらうための資料作成も児童自ら行い、交流１日目に自ら説明できるように準備をした。

○交流中の様子

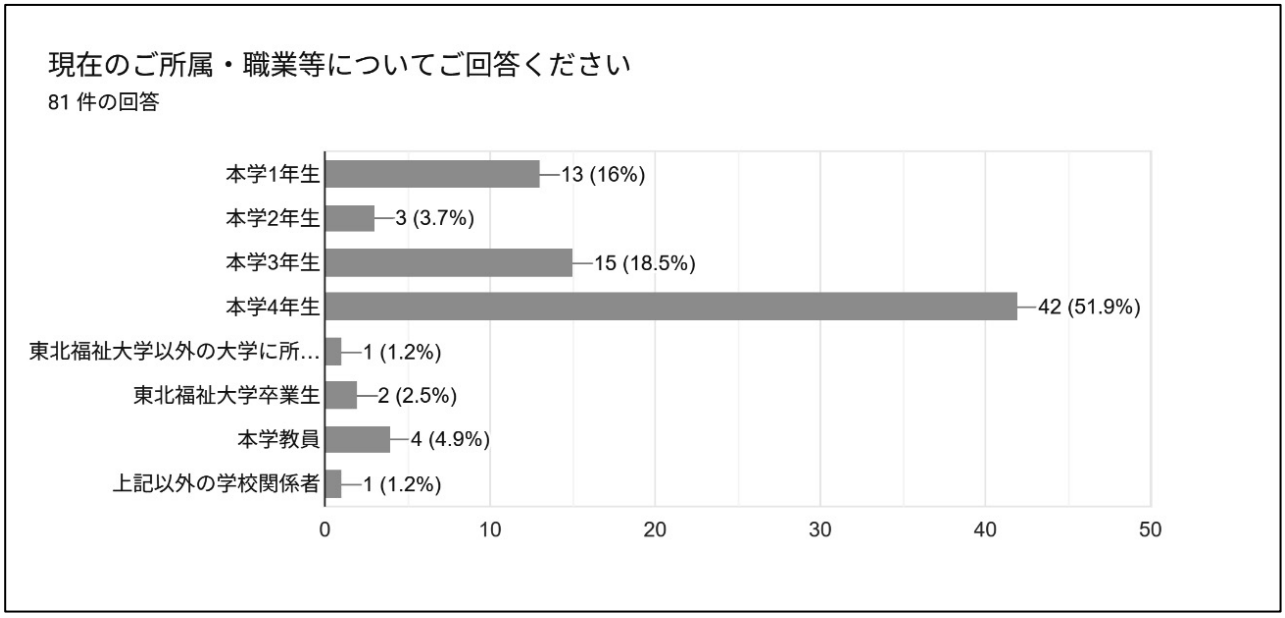
交流学級の児童から、「話すときはみんなでロジャーを回して話そうよ。」という発言や、グループ学習の際に、児童が聞き取りやすいよう、耳元で話す姿が見られた。

3. 考察

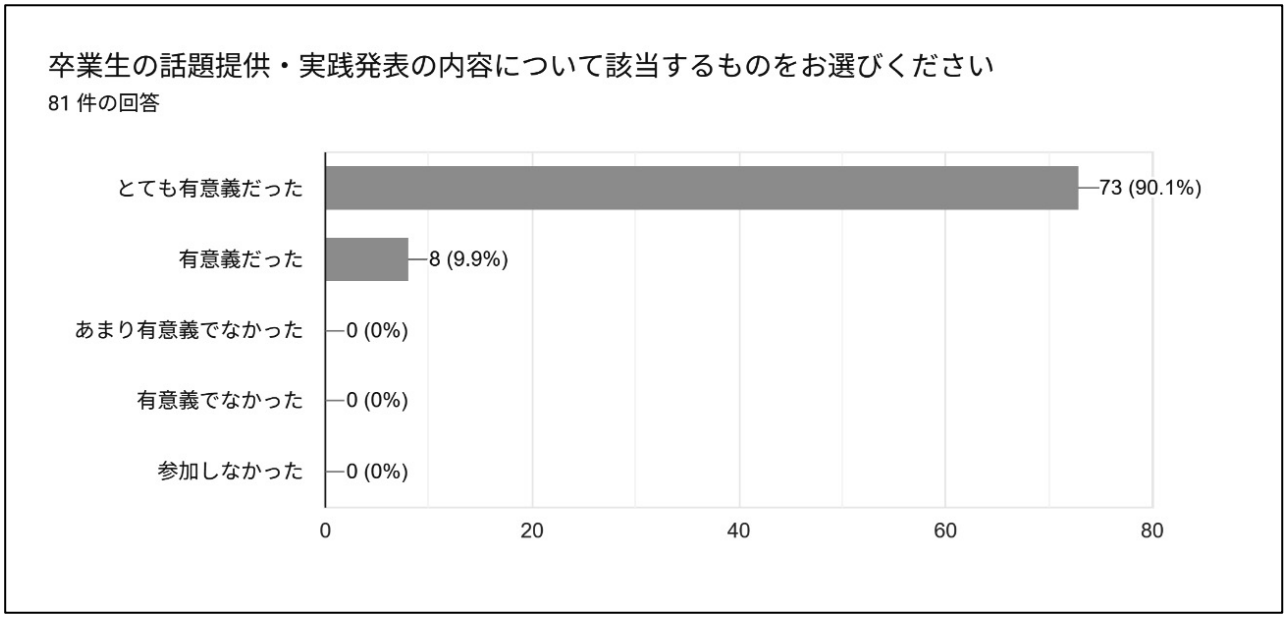
D&I の実現に向けて、聴覚支援学校でできることについて、大きく２つの側面があると考える。１つ目は自己理解を深める側面。２つ目は相手に理解を求める側面である。自分の障がいについて考える時間を取ったことで、聞こえにくい音があることや、それに伴った対処法について考えてから、交流学習に臨むことができた。本人の安心感や、集団の中で学ぶ意欲に繋がったと考える。更に、相手に理解を求めるという点では、自己理解をした上で、どんなことに気をつけて欲しいのかを伝えることが大事なのではないかと考える。お互いが理解し合い、共同的な活動ができるよう、今後も取り組んでいきたい。

第５分科会（特別支援）アンケート結果

１．分科会参加者



２．卒業生の話題提供・実践発表の内容



卒業生の話題提供・実践発表の内容についての意見・感想（自由記述）

●実践例をたくさんあげていただきながらの発表で、これまで学んできたことや経験してきたことなどを思い出しながら、学びをより深めることに繋がったと思う。来年度の特別支援学校での実習にも、進路について考えることについても、とても参考になる内容だった。

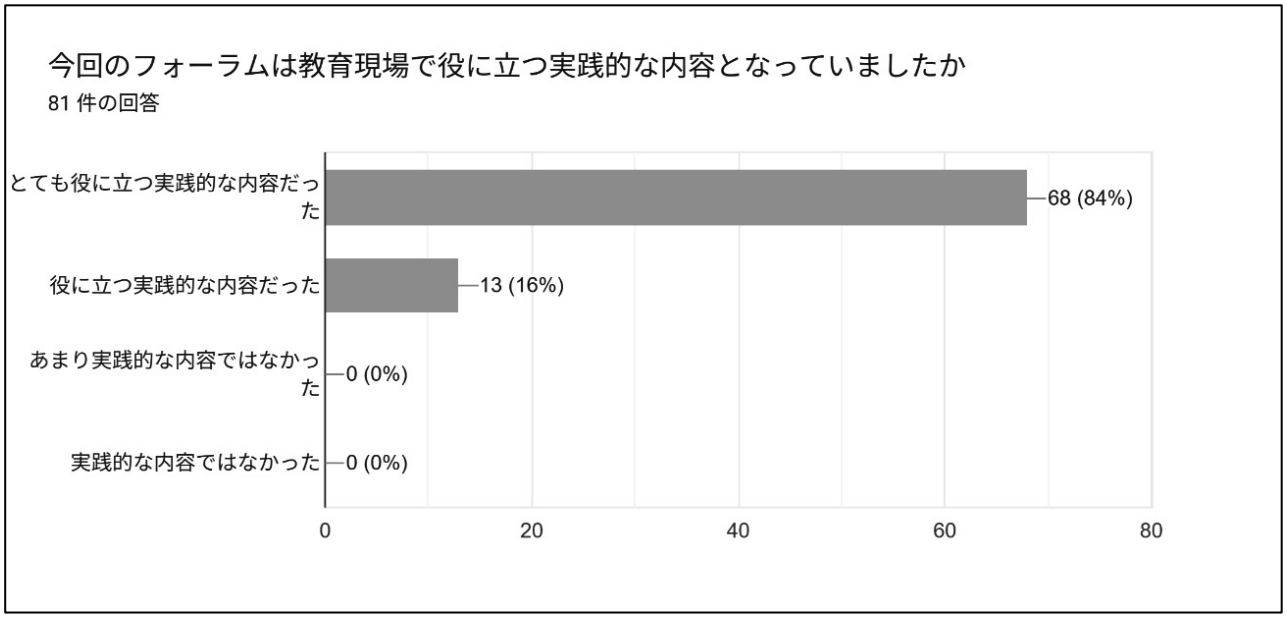
●聾学校だからといって、手話に頼るのではなく、日本語の良さを生かしながら、まずは言葉の意味を

伝えることが大切なのだと改めて感じた。河田先生の聾学校での普段の生徒との関わり、準備等がとても念入りで、本校の先輩として尊敬しました。

●現場の先生のお話が聞けて、とても貴重な経験をさせていただきました。特に、実際にあったことをお話いただけたので、とても興味深く学びが深まりました。私も、今できることそれから教員になってからできることを考え、子供たちと関わっていきたいです。

●学校現場の子どもたちと一緒に考えて学び続ける姿勢が大切だと感じました。インクルージョンを考える上で、自己理解、学び方の違いなど多様性を認めることを教員自身も大切にしていきたいと思いました。

3．今回のフォーラムは教育現場で役に立つ実践的な内容となっていましたか



今回のフォーラム全体について意見・感想（自由記述）

●子どもたちのより良い学びのために教員としてできることは何かを考え、さらに今大学で学ぶべきことを考えていきたいと改めて考えるきっかけになりました。ありがとうございました。

●今回のフォーラムでは講義形式だけでなく、グループワークなど自分たちが考える機会が多くあり、講義と実践の二つの側面から取り組むことで新しい学びを得られたように感じた。

●今回の教育フォーラムに参加して、来年度からの教員生活を見据えた学びを得ることができました。特別支援教育に携わる上で D&I は必要不可欠なものだと理解することができました。子どもたちの成長を信じ、専門的な知識を元に教育を行うことができる教員を目指していきたいです。

●進行がスムーズで、かつ参加しやすい雰囲気があり、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。

総　括

親しみのある継続的な学びの場の提供を目指して

「TFU 教育フォーラム 2025」実行委員長
佐藤　恵

TFU 教育フォーラムは今年度で 14 回目を迎えました。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」という大テーマのもと、全体会では初のパネルディスカッション形式を採用し、さらに、それに続く 5 つの分科会でも活発な議論が展開されました。対面開催を基本として、当日は総勢 600 名（うち、学外一般参加者 50 名）を超える方々にご参加いただきました。おかげさまで、開学 150 周年の年に相応しく、盛況のうちに終了することができました。改めて、登壇者の皆様、教職員、学生実行委員、関係各位のご協力に感謝申し上げます。

実行委員長の立場から、今回の TFU フォーラムの準備・運営をおおまかに振り返り、特筆すべき成果や今後の課題について総括したいと思います。

1. 「TFU 教育フォーラム 2025」開催形式について

2025 年度の第 1 回実行委員会を 5 月初旬に行い、開催形式について話し合いました。昨年度と同様、基本的に対面での実施を決定しました。

全体会については、昨年度学内講師による全体講演を行いましたが、次年度への検討課題として学外講師の招聘、並びに、複数人による討論方式が挙げられていました。そこで、今年度は実行委員の一人である長田徹教授をコーディネーターとし、2 名の学外パネリストをお招きする形で全体会を実施いたしました。これまでの教育フォーラムを通じてパネルディスカッション形式による実施は初の試みでしたが、非常に活気のある討論が展開され、充実した全体会となりました。今年度の大きな成果であったと思います。

分科会については、実践報告を中心に分科会毎に内容を検討しました。現場でご活躍されている多くの卒業生を登壇者としてお迎えし、話題提供をいただきました。特に、第 4 分科会（中等英語）では、発足 5 年目となる英語科コース初の卒業生（一期生）にご発表いただき、非常に感慨深いものとなりました。

映像記録については、昨年度 Meet での録画に不具合が発生し、十分にできなかったことから、録画方法について再検討を行いました。それに合わせて、合理的配慮への対応方法については、ライブ配信アプリを用いた字幕の掲出から「UD トーク」の利用へと変更しました。録画映像には字幕対応を施し、教育実習中などやむを得ない事情により当日参加できなかった在校生に対して、後日配信用として活用しました。

2. 準備・運営について

5 月と 7 月の 2 回、フォーラム実行委員会を開催し、実施計画案を策定しました。昨年度と同様に学内 Gmail の Chat 機能を活用して「ホウ・レン・ソウ」を行い、情報と資料を共有しながら円滑かつ迅速に準備を進めることができました。

学生実行委員会については、各ゼミの 3 年生を中心として構成されました。実行委員に選出された学生たちは、実行委員長をはじめ、各役割分担について積極的に引き受けてくれました。事後アンケートでは、実行委員として参加したことへの満足度について、9 割以上の学生が「とても満足している」「満足している」と回答しました。その根拠として、普段なかなかできない体験を通じて、準備や運営の大変さとやりがい、臨機応変に対応することの必要性を感じたことなどを挙げています。実行委員を務めた学生たちにとって、フォーラムがよい学びの場となったことを嬉しく思います。

3. 今後に向けて

昨年度の教育フォーラムに課題の一つとして、本教育学科 1 年生の参加者がいなかったことが挙げられ、参加者増に向けて検討を行ってきました。来年度より 1 年次の導入教育科目「リエゾンゼミⅠ」の学習計画に教育フォーラムへの参加を明記し、1 年次から教育現場の実際に触れる機会を取り入れることが決まりました。今年度は過渡期の措置として、「リエゾンゼミⅠ」の担任を通して教育フォーラムのチラシ・データを全員に配信し、参加を強く推奨することになりました。参加を強く推奨するのみか、あるいは、参加した分を振替授業とするかどうかは、各クラスの担任に対応をお任せしました。お声かけいただいた結果、全体会には 134 名、分科会には 110 名の 1 年生が参加しました。今後は、1 年次に全員参加することで、教育学科の取り組み・特色の一つとして教育フォーラムに親しみ、2 年次以降も継続的に参加し、学生実行委員として運営に携わってくれることを期待したいと思います。在学中にこうした関わりを持つことで、卒業後も愛着あるイベントとして教育フォーラムに関心を寄せ、リカレント教育の機会と捉えて積極的に参加し、ひいては、登壇者として戻ってきてくれることを願っております。

教育フォーラムを通して、本学在校生・卒業生に親しみを持って継続的に学び続けられる場を提供するだけではなく、同時に一般の方々にも開かれた学びの場を提供し、親しまれるイベントとなるよう、さらなる発展を目指していきたいと思います。

末筆ながら、貴重なお話を賜りましたパネリスト・講師・講評の先生方、保育や教育現場での実践的話題をご提供いただいた発表者の皆様に対しまして、改めて御礼申し上げます。

また、学内施設設備の利用等に関してご協力を賜りました教務課・施設管財課・障がい学生支援室の職員の皆様、学外広報にご尽力いただきました広報 PR 課の職員の皆様、誠にありがとうございました。

そして、教育実習や授業の合間を縫って打ち合わせを行い、当日の運営に力を合わせて頑張ってくれた学生実行委員の皆さん、お疲れ様でした。

次年度以降も TFU 教育フォーラムに対するより一層のご理解・ご協力をお願いしつつ、御礼の挨拶とさせていただきます。

「TFU 教育フォーラム 2025」学生実行委員名簿

本教育フォーラムは、各ゼミ代表者から選出された実行委員によって 10 月に学生実行委員会が立ち上げられ、多くの係を分担し運営されました。学生実行委員会打ち合わせを２回行い、綿密に事前準備を行いました。当日は学生実行委員の頼もしい働きにも助けられ、無事に全てのプログラムを終えることができました。

担　当	学生氏名	所属ゼミ	備　考
委員長	小林 愛理	伊勢ゼミ	開催挨拶、会場内誘導
副委員長	山田渚々帆	渡会ゼミ	開会行事 司会
誘導	菅野 碧唯	今野ゼミ	司会（小）兼任
	嶋田 真弘	金井ゼミ	
	薄井 未来	冨樫ゼミ	
	藤田 胡桃	冨樫ゼミ	
(全体会)受付	安達 莉子	佐藤(郷) ゼミ	記録(小)兼務
	富樫 心春	白井ゼミ	
(全体会)記録	藤倉 康誠	加藤ゼミ	ICT(小)兼務
	松原 健人	門脇ゼミ	
(全体会)ICT	前島 桃花	中林ゼミ	
(幼)司会進行	佐々木美颯	高野ゼミ	
	鈴木 莉央	君島ゼミ	
(幼)タイムキーパー	佐伯 袖音	君島ゼミ	
(幼)記録	行場 深優	平川ゼミ	
	髙山 美優	石森ゼミ	
(幼)受付	河内 美羽	山﨑ゼミ	
(幼)分科会進行	桑折 侑菜	青木ゼミ	
	白井 凛紗	河合ゼミ	
(小)司会進行	菅野 碧唯	今野ゼミ	誘導(全)兼務
	橋本 拓磨	上條ゼミ	
(小)タイムキーパー	半沢 侑己	三浦ゼミ	
(小)記録	安達 莉子	佐藤(郷) ゼミ	受付(全)兼務
	富樫 心春	白井ゼミ	
(小)ICT	藤倉 康誠	加藤ゼミ	記録(全)兼務
(小)受付	梅津 愛	石原ゼミ	
	星　理久	冨樫ゼミ	

担　当	学生氏名	所属ゼミ	備　考
(中社)司会進行	大友 陽叶	長田ゼミ	タイムキーパー(中社)兼務
	佐藤 百花	長田ゼミ	
(中社)記録	前島 桃花	中林ゼミ	
	松原 健人	門脇ゼミ	
(中社)受付	江本 悠生	冨樫ゼミ	
	星　理久	冨樫ゼミ	
(中英)司会進行	生出 圭亮	黄ゼミ	タイムキーパー(中英)兼務
	横川 京	髙橋ゼミ	
(中英)記録	秋田 夢空	熊谷ゼミ	
	福島 奈々美	髙橋ゼミ	
(中英)受付	一原 麗華	熊谷ゼミ	
	高橋 歩乃佳	髙橋ゼミ	
(特支)司会進行	高久 和花	大西ゼミ	タイムキーパー(特支)兼務
	孫田 結菜	鳩原ゼミ	
(特支)記録	大沼 悠衣	杉浦ゼミ	
(特支)受付	千葉 帆華	黄ゼミ	
(特支)ICT	髙橋 朱李	庭野ゼミ	

TFU 教育フォーラムのあゆみ

実施月日/参加者数/特記事項	大会テーマ・主な内容等
子ども教育フォーラム 2012 8 月 18 日、参加者：300 名 卒業生のリカレント教育として教育フォーラムを開始	テーマ：つながりのある保育・教育を求めて 第 1 部：基調講演 「教材でつながる、教材をつなげる」 東北福祉大学　西林克彦教授 「保幼小連携の枠組み‐実際と展開‐」 神戸大学大学院　北野幸子准教授 第 2 部：ワークショップ「ワールドカフェ in　TFU」 担当者：三浦和美（子ども教育学科・教職）
TFU 子ども教育リカレント講座 2013 10 月 19 日、参加者：150 名 分科会形式の運営を開始	第 1 部：記念講演 「考えてみよう　眠りのこと　～どんな時に眠くて、どんな時に眠くない？～」　東北福祉大学　水野康准教授 第 2 部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：小石川秀一（子ども教育学科・教職）
TFU 教育フォーラム 2014 10 月 11 日、参加者：155 名	第 1 部：記念講演 「算数のたのしさ」　東北福祉大学　石原直教授 第 2 部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：土生昭文（子ども教育学科・教職）
2015 年 4 月　教育学部教育学科・大学院教育学研究科発足により共催実施	
TFU 教育フォーラム 2015 10 月 3 日、参加者：800 名 初めて中央講師迎え開催 学科と大学院共催を開始	第 1 部：記念講演 「子どもも大人も居心地の良い学校、家庭、地域社会をめざして」 教育評論家・法政大学教授　尾木直樹先生 第 2 部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2016 11 月 6 日、参加者：390 名	第 1 部：講演 「特別支援教育の動向」　東北福祉大学　大西孝志教授 第 2 部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2017 10 月 14 日、参加者：100 名	第 1 部：講演 「空がこんなに青いとは　わたしの初人験」 東北福祉大学　土生昭文准教授 第 2 部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）

TFU 教育フォーラム 2018 12 月 8 日、幼保：323 名 10 月 6 日、教職：174 名	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して　子どもの学びをどう幅広く支援するか 大会テーマを設定し各分科会を実施。 中等部会新設。 担当者：今野和賀子（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2019 12 月 14 日、幼保：427 名	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 10 月 12 日、教職：台風 19 号により中止 担当者：浅川俊夫（中等教育専攻・社会）
TFU 教育フォーラム 2020 11 月 28 日	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 新型コロナウイルス感染症拡大により中止 担当者：高屋隆男（特別支援教育）
TFU 教育フォーラム 2021 12 月 4 日、参加者：655 名 感染症対策のためオンライン開催	大会テーマ：ポストコロナへの志向 －すべての子どもの確かな学びを目指して― 5 分科会（幼保・小 A・小 B・中・特別支援）で開催 担当者：渡会純一（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2022 12 月 3 日、参加者：603 名 対面・オンラインハイフレックス方式による開催	大会テーマ：ポストコロナへの志向 －すべての子どもの確かな学びを目指して― 6 分科会（幼保・小 A・小 B・中高社会・中高英語（新設）・特別支援）で開催 担当者：冨樫進（中等教育専攻・中高社会）
TFU 教育フォーラム 2023 12 月 2 日、参加者：629 名 対面・オンラインハイフレックス方式による開催	大会テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して 5 分科会（幼保・小 A/B・中高社会・中高英語・特別支援）で開催 担当者：杉浦徹（特別支援教育）
TFU 教育フォーラム 2024 12 月 7 日、参加者：439 名	大会テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して 5 分科会（幼保・小 A/B・中高社会・中高英語・特別支援）で開催 担当者：加藤 幸男（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2025 12 月 6 日、参加者：606 名	大会テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して 5 分科会（幼保・小・中高社会・中高英語・特別支援）で開催 担当者：佐藤 恵（中等教育専攻・中高英語）

編集後記

本年度の教育フォーラム「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」を、盛況のうちに開催することができました。ご参加いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。社会の価値観がめまぐるしく変化し、子どもたちを取り巻く環境も不確実性を増すなかで、学びの在り方そのものを問い直す動きが全国で広がっています。AI の急速な普及やグローバル化の進展、人口構造の変化など、教育現場が直面する課題は複雑さを増すばかりです。こうした世相を背景に、今回設定したテーマは、まさに時代が求める学びの方向性を象徴するものとなりました。

個別最適な学びと協働的な学びは、しばしば対立概念のように語られることがあります。しかし本フォーラムが浮かび上がらせたのは、両者を往還しながら統合していくプロセスこそが、これからの教育に求められるということだったように思います。子ども一人ひとりの興味関心や発達段階に寄り添う「個」、そして多様な他者と関わって未来社会を創る「共」。その両立は決して容易ではありませんが、参加者の皆さまが示してくださった実践の数々は、その実現に向けた確かな手がかりとなりました。

今日の議論が、明日からの教育実践を少しでも前に進める一助となることを願っております。今後とも、本フォーラムが地域の教育力を高める場として機能していくことを期待し、編集後記といたします。

以上